桜吹雪

亜梨朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜吹雪

【Ｎコード】
Ｎ１５５３Ｑ

【作者名】
亜梨朱

【あらすじ】
とある学園の中等部。　ある日のちょっとした会話から少女は壊れてゆく……。何が少女を狂わせたのか。少年たちは少女を元に戻したい。ただそれだけなのに……　少しリアルな学園恋愛物語！

?. 新学期と桜吹雪（前書き）

連載小説初めてだなー…
皆さんに楽しんでいただけるよう、頑張ります！

?. 新学期と桜吹雪

新学期。

この学校に入学して三度目の春がやってきた。

校庭に高く聳える木々が、囁かな風に揺れ、学校の外の道路にある桜の木の花びらが風によって散る。
まるで粉雪のようにきれいに降る様子は生徒の目を釘付けにするほどだった。

新学期ということだから、クラス替えが行われる。
誰と一緒になるか期待を膨らませて校門をくぐる。

この学校は、奥から幼稚園、小学校、中学校と並んでいる（高校は隣の敷地）。
そのため小学生たちも満開の桜のゲートを楽しそうに歩き、中学校の校舎前を通って、小学校の校舎に向かう。

中学校の前の木はイチョウで、小学校の前は桜の木、幼稚園は梅と紅葉の木がある。
校風が良いと評判だが、落ち葉や散った花びら、銀杏のせいで、靴の裏にそれがくっつくし銀杏踏んで異臭はするし、落ち葉で滑るしで正直最悪だ。

クラスごとに下駄箱の場所が違うから来客用玄関の前にクラス発表の紙が張り出される。
全校生徒の人数はおよそ六百人。
六百人一気に玄関前に群れるわけではないが、通学方法がほとんど

地下鉄とバスのため結構な人数が玄関前にたまる。
俺は、背が低いわけではないが高くもない。
二メートルほど先のクラス発表を見るには身長と視力が足らない。
結果的に後ろの方で生徒が退くのを待つわけだが、これが全く減らない。
逆に、増えていくばかり。
どーすんだ。これ。

「晋一！おはよっ」
「陸か。はよ」

校門から友達の赤松陸がやってきた。
相変わらずボタン全部外してパンを食べながらの登校。
校則違反しまくる問題児だ。

「めっちゃ混んでるじゃん！あの中には入りたくねーな」
「だよな。先生たち（あいつら）も学年ごとに分けろっつーの」

ちなみに俺も問題児。
言葉遣いと制服の着方が悪いからって問題児扱いだ。
あのクソ共。

「あー、晋一ぃ、おはよぉ」
「おはよぉ」

ぶりっこで有名なグループ（榊、浜口、松本、村岡）がやってきた。
こいつらも相変わらずぶりっこがマジやべぇ。

「陸、今何時だ？」
「えっとねぇ、七時四十五分だよぉ」
「お前には聞いてねぇよ。どっか行け」
「一応言っとくけど、今は七時五十分。その時計ずれてんじゃねーの？」

校庭の時計も五十分を指していた。
聞いてないのに答えた上、時間があってねぇとは、最悪だな。
コイツらと同じクラスになっていないことを祈る。
「あっ！柚兎左ぁ！おはよぉ！今日早いねぇ」
今度は向こうから江川柚兎左が歩いてきた。
「あぁ、おはよう」
笑って返事をする。
見るからに作り笑顔だろ。
「柚兎左、おはよっ」
「陸も晋一もいたの？おはよう」
「柚兎左、毒舌ぅ！」
「新学期、久しぶりにあったのにそれないじゃん」
「ああ、ごめぇん」
柚兎左は軽く目を逸らしてウッザって顔をしてから、クラス発表の紙が貼ってある方を見る。
「りっちゃんたち見たの？クラス替え」

りっちゃんとは浜口の事である。

「見たよぉ。うちらA組だったんだぁ。柚兎左も見てきなよぉ」
「そうだね。見てくるか…。陸と晋一は見た？」
『いーや、まだ』

何故かハモった。
見事にハモると気持ち悪い。

「んじゃあんたらのも見てくるよ」
「頼んだ」
「よろしく」

とても有り難い提案だ。
女子の群れになんか入りたくねえ。陸も同じだろう。
柚兎左は歩いて群れに行くと、思いっきり腕で人をかぎ分け、てか殴ったり押したりと暴力で突き進んだ。
後輩にあんな態度とって良いのか？

「陸…、改めてあいつすげぇな」
「ああ。まさにどんだけーだよな」
「古いから。それ」
「あ、もう戻ってきたぞ」

柚兎左が端の方から出てくるのが見えた。
あいつは肩やらスカートを払いながらやってくる。

「ありゃー、菌を払ってるよな」

陸が呟いた。
聞こえていたらまずいから黙って無視する。

「私たちB組だってよ」
「三年B組かぁ。ここはAが良かったな。」
「陸、あいつらと一緒のクラスがいいんだ…。意味わかんねー」
「俺はBでよかったと思うけどな」
「んじゃ、晋一、行こうか。意味不明の趣味を持ってる人は置いて」
「だな」

そう言って、俺と柚兎左はB組の下駄箱に向かう。
風が強く吹き、桜の花びらがかなり散った。晴れた青空にきれいなピンク色が舞う。

「きれい…」

ああ、桜吹雪とはこのことなんだな。
俺は、友達と桜吹雪の中を陸の怒声をBGMに歩いていった。
そう…

『友達』と———

?. 新学期と桜吹雪（後書き）

如何でしたか？
って一話目じゃ分かりませんよね（汗）
誤字脱字の指摘など、感想を頂けたら嬉しいです！

?. B組の人々（前書き）

グダグダですねー…
文法あってるのかな？コレ…

?. B組の人々

三年B組の教室は三階にある。ちなみに、一階が一年、二階が二年、三階が三年となっている。
最初の春は楽だった。
二度目の春は足が疲れる。三度目の春…、つまり今日。今日は、足が死ぬ。
もちろん階段のことだ。
段差が高くて、滑りやすいから無駄に危ない。
高い分、外の眺めはいいのだがこれのせいで朝から疲れがたまる。
そんな清々しくない朝、エレベーターが目の前にあると乗りたくなるだろ？設置してあるくせに使用できるのは職員のみ。これは一種の差別だろう。
「晋一…、置いてくなよ！これから一年ほど同じ空間で勉強すんだから、仲良くしよーぜー」
「これも一種の遊びだ。いじめという名の」
「何か怖い言葉が聞こえたんだけど…高橋君？」
遊びにもいろいろあんだよ。それを言うと殺しも遊びになっちまうか。
「柚兎左は？」
「さっき海月と美桜と先に行った」
「海月ねぇ。ホント仲良いよなー」
「一年の時はあれだったけどな」
「仲悪かったのか」
「悪くはねぇ。あまり関わりがなかった、親友になった、いつの間にか喋ってるところを見なくなった、っつーのが正しい順序だ」
「何でそんなに覚えてんだ？」
我ながらそう思う。
印象的だったからか？海月の彼氏と仲良かったし。

「まぁ、いいんじゃね？」
「そーだな…っと。おはよう諸君！」
「陸！おはよっ！」
「晋一！おはよーさん」
「ああ…、はよ」
みんなテンション高いな…。クラスの人は見知った人が多かった。
知らないやつは六人くらいか。
気だるく教室に入ると小野真広が声をかけてきた。
「あの地獄の階段のせいで疲れたか？しっかりしろよ！サッカー部だろ？」
そう言われても疲れるもんは疲れる。
「あの階段を上り下りする特訓したら足が鍛えれそうだな」
「あー、確かに。ってホントにやるなよ！」
俺は今年のサッカー部のキャプテンだから、全ての権限は俺にある。
ちなみに、陸も真広もサッカー部である。
あの階段を使ったのを練習メニューに入れたいと言えば即決だ。
責任問題とかは面倒くせぇけど、こういうのはかなり気持ちがいい。
「俺の席は…」
辺りを見回して、自分の席を探す。
どうせ、出席番号順なのだろう。俺は確か…って自分でクラス発表を見ていないから聞くしかない。
陸は苗字が赤松で学年出席番号順なんてあったら一番最初になる。
つまりは毎年一番前の一番端なので出席番号順なんか気にしなくて良い。
俺は高橋だから、はぁー…何番だろう。
「柚兎左ぁ！」
女子と話してるところ悪いが、重い荷物をさっさと片付けたいから声をかける。
「何？」
「俺の出席番号何番か分かるか？」

「男女別で十番！真ん中の列の前から三番目の左」
言われたところを見ると空席だった。
よく覚えてるもんだ。
とりあえず、荷物を置くために早足で机に向かう。
「どっせい！」
あー、肩が楽になった。
「なー、晋一！今日珍しく午前中授業だから、この後オケらねぇ？」
天城直紀が声をかけてきた。オケらねぇとはカラオケ行かない？という意味だ。
「あー、金がねぇ。奢ってくれ」
「嘘付け！毎日財布に三万入ってるくせに！」
何で知ってんだよ。
「なぁ、行こうぜ？最近行ってねぇじゃん？」
昨日まで宿題なしで一ヶ月くらい休みがあっただろう。あえて言わないでおくが。
「何で俺なんだよ」
溜め息混じりに呟くと、直紀と一緒にいた山本和宏が耳元で囁いた。
「おまえが来ないと女子が来てくれねぇんだよ」
そんな理由で俺を誘ったのか。
「今度ドラゴンズのポスターあげるから」ドラゴンズ！
「行くぜぇぇ！キャラオケェ！」
ドラゴンズの為だ。金など惜しくはない。
人が野球バカと言おうがサッカーバカと言おうが関係ない。俺は俺の趣味を突き通す。自分で言っておいて何だけど意味わかんねぇ。
「よっしゃ！柚兎左ぁ！今日の放課後暇か？」
「暇だけど、どっか行くの？」
「カラオケだよ！カラオケ」
カラオケと聞いた柚兎左の目は一瞬キラーンと輝き、超満面な笑みをこぼす。
「行く行く行く！絶対行く！」

「うっしゃー！海月は？」
「一応空いてるけど」
「んじゃあ道連れだ！」
こうして、和宏は幾多の女子をカラオケに誘い、合計八人となった。
どんだけ誘えば気が済むんだ？コイツ
「抜けて良いか？」
「断固許さん。三人はおまえ目当てなんだからな！」
つまり、海月と柚兎左以外の女子か。
ていうか、海月誘った時点で五人だったからストップすればよかったものをこんなに増やして部屋がキツキツじゃねぇか。
「ホームルーム始めるぞー！」
学級委員長がでかい声で叫ぶと、ほとんどの人が特に急ぐわけでもなくグダグダと席に着いた。席に着いたからといって教室は静かにはならなかった。
五分くらいで静まり、短活を始め、テレビ放送朝会を行い面倒くさい授業が始まった。
早く放課後になりますように…

の反対で放課後になるな。

?. B組の人々（後書き）

続きは全く考えてません（笑）
どういう風にしようかなー

?. 憂鬱な放課後（前書き）

昨日カラオケ行ってきました（ ´ ∀｀）
五時間くらい歌ったら、のどが……

?. 憂鬱な放課後

できれば来て欲しくなかった放課後。
昼食を食べてから、すぐに下校するから時刻は十二時半。
学校の駅から三つ離れた駅にあるカラオケボックスで歌うらしい。
そこは安くて設備はいいが、その駅で降りる先輩に見つかったら終いだ。
帰ってからにすればいいものを、時間が短くなるからと言う理由でそのまま直で行くらしい。
みんな金を五千円ほど持っているという何とも悲しい現実。何故俺は一万円も持っているんだ…。何故百円にしなかったんだ、コノやろー。と自分を呪った。
「晋一！一緒にデュエットしよーね」
「あ、美保ずるーい！咲妃が晋一とデュエットするのよ！」
和宏が言う俺目当ての女子たちが隣で群れる。
俺は別に歌いたくないのだが、こっそり帰ることもできずにカラオケボックスの前まで着いてしまった。
「んじゃー、盛り上がるぞ！」
和宏の一言で俺以外の周りのやつらは
『おぉ――――っ！！』
と歓声をあげた。
周りの人々の視線が痛く感じるのは俺だけなのか？
和宏に睨まれたから俺も小さな声で言った。
「おー…」

「んじゃー、一番バッターは柚兎左様が歌ってやるよ！！」
「いえーい！柚兎左、いっちゃえー！」
一番最初に柚兎左が歌うらしい。
柚兎左は一般に言うオタクでアニメソングはほぼ全部知っているらしい。
柚兎左はいつも盛り上がるアニソンを歌い、暗い歌は歌わない。歌ったらすぐに盛り上がる曲を歌う。
和宏は、こりゃまた古い曲を歌う。しかも演歌ばかりで若干テンションが下がる。
海月は、アイドルグループが歌っている曲を歌う。
直紀は、スゴいことに洋楽。
その他は、女のアイドルグループの曲をデュエットしてる。
俺は何もしない。
「やっぱ柚兎左声高ェな」
「柚兎左、声どっから出てんの？」
「ふはははは。これは合唱部で鍛え上げた声なのだ！誰も真似ることはできまい」
「調子乗んな」
海月が柚兎左の頭に瓦割のチョップを食らわす。さすがの柚兎左も「いだっ！」と声を上げた。
「海月…痛いッス…。滅茶苦茶痛いッス。頭割れる…」
「そんなに痛かった～？ごめんよ！まあ許せ」
「許すか――――っ！！むっちゃ痛いからね！」
柚兎左と海月で戦闘が始まった。
そこらへんの灰皿（鉄製）を振り回したり、シャープペンシルを投げたり教科書を投げたり。
周りは楽しそうな反応をしていたけど、俺から見るとかなり過激に見える。
下手したら重傷を負って、堕ちるか昇るか。

此方にとばっちりが来ているのが迷惑だ。
「柚兎左、海月。やるなら外でやれ。俺まで怪我したくねえからな！」
「あー、新学期早々練習試合あるんだろ？大変だなー」
「サッカー部なんだから和宏も出るだろーが。何他人事みたいに言ってんだよ」
「俺はピンチヒッターだからな！補欠としては他人事さ」
野球じゃねえよ！
「へー、試合があるんだあ」
「高橋君は運動神経抜群だよね？小学校とか何やってたの？」
ここで三人の女どもが話に割り込んできた。
別に嫌いではないから会話をするとしよう。
「小学校は部活の掛け持ちやってたぜ？」
「マジでー？何やってたの？」
「野球部、陸上部、サッカー部だ。」
「えっ…」
「マジでぇ？スゲエじゃん！」
「だから運動神経いいんだー」
誉められるとはこうも気持ちがいいものなのか。
いつの間にか柚兎左と海月は大人しくなってるし。
「晋一…、それって本当の話？」
柚兎左が問う。何となく雰囲気がさっきと違うような感じがした。
俺が気にすることでもないから俺は何時もの口調で返事する。
「嘘付いてどーすんだよ」
「そうだよね……あいつと…」
何かブツクサ言ってるが、別にいいよな。さっきも思ったが、俺がそんなに気に留める事じゃねーし。
「てか直紀どんだけ英語ぺらぺらなんだよ」
「直紀って英語の成績悪かったって言ってたけど…何で？」
「スペルが解らねえだけ」

『マジでか！？』

その後カラオケでは、殆ど直紀の歌う洋楽が流れ、俺たちはある意味英会話の勉強ができた。

ことごとく歌って、店を出るときは延長しまくって六時すぎだった。カラオケに来たけどやったことは英会話の勉強、雑談が主だった。次行くときはもう少し真面目に歌おう。

それぞれ別れたが、俺の部活のかけ持ちについて話したとこらへんから柚兎左の元気がなかったのは気のせいだろうか？

?．憂鬱な放課後（後書き）

次から、さらにグダグダになります^__^；

?．試合当日（1）（前書き）

改行というものをこまめにやってみました。
柚兎左目線です

?. 試合当日（1）

「ねぇ、今日サッカー部の試合なんでしょ？」
「そうそう！あたし部活あるんだけどサッカー部の試合観に行くんだー」
「あたしも見に行くよー！晋一出るんでしょ？なら観に行く」
さっきから女子たちがわいわいと騒いでいる。
本来なら私もその中の一員であったけど、今回…、いやこれからもあの中に入ることはないだろう。
別にサッカー部の試合を観に行かないわけではないんだけど、たくさんの人たちとグループになって行くことはもう無いだろう。
「柚兎左も観に行くよね？一緒に行かない？」
「…ごめん、委員会があるから」
もちろん嘘だけど、女子のグループってしつこく誘ってくるから正当な理由を用いらないと諦めてくれない。
そこが女子のグループの面倒くさいところだと思う。
「そっかー、残念だね」
「じゃあうちら行ってくるから、窓からチラッと見てなよ」
「うん、そうする」
そう言って、女子たちは去っていった。
私はどこから見ようかな…。
ここからでもいっかな…。てか、帰るときで良いかな、本当に委員

会が無いか聞いてこよ。

「穂波！今日委員会無いよね？」
「あるよー、あと十五分後くらいから始めるからファイル持って相談室ね」
「ま、マジでか」

確認しといて良かった。
じゃあ試合観れないね。嬉しいんだか、悲しいんだか不思議な気持ちだ。

十五分もあるから帰りの準備でもしておこうかな。

「穂波、良かったら相談室まで一緒に行かない？」
「あ、いいよ」
「ありがとう」
「じゃ、後で呼びに行くわ」
「うん」

帰りの準備完了！
あと三分なのに穂波は来ない。仕方がないから私が穂波のクラスに行ったんだけど、どうやら彼女は先に行ってしまったらしい。

呼びに来るんじゃなかったの？全く。

サボってやろう。

呼びに来なかったのが悪いのよ。私に罪はないわ。

そういうことで、鞄に入っているゲーム機を取り出して女子トイレに入った。

三階は全て洋式便器だからどの部屋も広い。

とりあえず、一番奥に入って、鍵をかける。

イヤホンを取り出し、ゲーム機にセット。

携帯もタイマーをセット。（つい時間を忘れてやり込んじゃうから）

さーてと、楽しい時間を過ごしましょう！

ってもう終わりですか！？

携帯のバイブレータを急いで止めてゲーム機の電源を切る。

それなりに楽しかったのはいいんだけど、やっぱ時間とは早く過ぎて行くものだ。

とりあえず、ゲーム機をスカートのウエスト部分に挟んでトイレを出る。

一応、入ってたって事にして水を流す。

出ても誰もいなかったから、こんな環境破壊の一つを行わなくてよかったんだなって思う。

今日は、帰ろうかな。

たくさんゲームもしたし、先生に叱られるなら明日がいい。

教室に入ると、机に荷物がたくさん乗っていたので、恐らく、みんなサッカー部の試合を観に行ったのだろう。

時計は五時を指していて、用のない生徒の下校時刻が迫っていた。私は、その用のない生徒に当てはまるからバックを背負って下校することにした。

?・試合当日（1）（後書き）

短っ！

次はきちんと書きます！

明日学校だなぁ…

?．試合当日（2）（前書き）

やっとできた（，∀、）
晋一目線に戻ります（^ー^）

?．試合当日（2）

あと一点…。

俺たちの学園と相手の学校の差は、一点しかなかった。もちろん、俺たちが負けている形だ。

野次馬が集まってきゃーきゃー言っているせいか、緊張感がさらに高まる。

観戦してくれるのは嬉しいが、流石に五月蝿すぎる。もう少しボリュームを下げてほしいものだ。

それに、いくら練習試合とはいえ、絶対勝たなければならない。昨日まではたかが練習試合、真剣に取り組めばいいだろうと思っていたが、今日顧問の北島大先生が

「勝てば今日は宴会だ。負ければ……ただじゃすまねぇからな？」

と脅されたため、何があっても勝たなければならない。

今はボールの奪い合いで、相手との差は一点に抑えているが、やはり厳しいようだ。両者共に息が上がり始めていた。

ふと気付いたが、柚兎左の姿が見あたらなかった。海月は来ているし、今までの試合もほとんど顔を出していたのだが、今日はいなかった。

あのカラオケの日から、妙に俺を避けている気がした。
俺には関係ないと思っていたが、流石に避けられては気になるものだ。

今までにそういう暗い雰囲気を出していたことはなかった。…とは言えないが。
とりあえず、俺に対してはなかった。ここはどうするべきかと迷う。
聞くにもタイミングが掴めないし、その前に授業以外で会話をしていない為、無理だった。

「晋一！パスっ」

ボールが俺の方に回ってきたため今は試合に集中するとしよう。

目の前はほぼ無人。思いっきりドリブルして蹴れば行ける。

外野の女子たちのきゃーきゃー声がさらに大きくなる。妙に緊張したが、試作「ＴＨＥ・ミラクルスタースーパーシュート」でボールは一直線にゴールに入る。

「よっしゃー！」
『きゃー』
『部長ぉー！』

これで同点。あとは再びゴールに入れることができれば勝機は我が手に。

「あと一点で勝てるじゃねぇか！いやー、俺はやると思っていたよ。

さすが我が奴隷……ゴホンッ、…さすが我がチームだ！」
「今奴隷って言おうとしたよな？」
「敬語を使え、高橋」
北島先生にとてつもない表情で睨まれた。
背筋がゾクッとして危険を察知したため改めて敬語で話す。
「奴隷と仰ろうとしましたよね？北島先生」
「北島“先生”？」
「き…北島大先生」
やっぱ勝たなければ殺される…。
「お前の耳は飾り物か？俺はチームと言ったぞ？生徒を奴隷なんて当たり前……ん〝ん〟！…そんな、可愛い生徒を奴隷なんて言うわけ無いじゃないか」
「先程から咳払いが多くありませんか？その前に恐ろしい言葉が聞こえるのですが…」
「空耳だろ。最近痰が詰まっていてな。風邪かな？」
「絶対違うと思います」
今日はやけに怖い言葉が聞こえるものだ。
北島大先生に視線殺しされたくないから、そこまで深くは突っ込まないが。
他の部員なんて、震えて下を向いてるやつもいれば、
「部長、よく命懸けな事ができますね」
という視線を向けてくるやつもいた。

我ながらそう思う。

「んじゃ、さっさといけ！奴隷ども！」

『やっぱ怖いこと言ってるよ！生徒奴隷扱いしてるよ！』

見事にメンバー全員でツッコミを入れ、試合に戻った。

俺たちが再びプレイし始めると、北島大先生は俺たちに聞こえないような声で小さく呟いた。

「緊張もほぐれたな。頑張れよ…奴隷ども…」

?. 試合当日（2）（後書き）

ペースが崩れてる…
文章も若干変わっていってる気がする…（悪い方に）
（―＿―；）

?．試合当日（3）（前書き）

相変わらず、夢見すぎだなぁ～
少女漫画みたい（　・∀・）

?．試合当日（3）

後半戦もそろそろ終わりを告げる。

点数は相変わらず同点。勝ってもいないし、負けてもいない。

北島大先生の雷は果たして落ちるのだろうか？

北島大先生の方を見る。

何だか気難しい表情というか、微妙に額に血管が浮いているような感じだ。

どうやら、引き分けでも雷が落ちるらしい。

負けよりは少ないと思うが、やっぱり落ちるよな…。

「晋一…北島大先生が殺気を向けてるような」

「ああ、多分勝たなきゃ死ぬぞ」

「やっぱり…はぁー…」

「死ぬ覚悟をしねーとな」

『ああ』

俺が呟くと、部員全員が相槌を打った。

去年は鼻でスパゲティ完食だったな…。食べきることができたが、鼻血が止まらなかったのを覚えている。

今年は何をされるのか…。

「やべえ！あと少し！」

「とりゃ！陸！」

「了解！」

ボールがこちらに回り、ゴールを目指す。

最悪なことに、ここからゴールへは結構距離がある。
上手くパスを回していかなければならない。

「うっしゃ！晋一！」
「おう！」

陸からパスが回り、ゴールを目指す。
敵がきたら味方にまたパスを回す。

「日向！頼んだ！」
「あ、はい！」

こうすると、かなりいいチームだと思う。多分、北島大先生が脅さなかったら、こんなに白熱した試合にはならなかっただろう。

もう一度、北島大先生の方を見る。
優しく微笑んでいる姿がはっきりと見えた。

「やっぱ、北島大先生は最高の先生だ」

静かに呟く。

ゴールが目の前にある。
これで、去年のような惨劇を防げる！

「晋一！」
「何で俺！？」

と、何故かボールが回ってきたので、先ほどと同じ、ＴＨＥ・ミラクルスタースーパーシュートを繰り出そうとした。

そう、繰り出そうとした、その時。
視界に柚兎左が映った。
別に普通に見ていたなら、ただの「あ、いた」って感じで軽く済ませる。
だが、そう軽く済ませる感じではなかった。
バックを背負って、群れから離れたところで立ち止まって見ていた。
———泣きながら

「晋一！」
「っ」

陸の声で我に返り、目の前を見ると、相手が目の前にいた。
急いで近くにいた陸にパスをした。
「行け！俺の素晴らしきシュートォ！」
陸は、そう叫びながらゴールに向かってボールを思いっきり蹴った。
ものすごい速さでボールはゴールに入る。
ボールがゴールのネットを突き破り、壁にぶつかった。

それと同時に、試合終了のホイッスルが鳴った。
得点はもちろん、四対三で俺らの勝ち。
『きゃあ――――っ！』
『うっしゃぁ――――――っ！』
校庭に歓声が響き渡る。
女子たちは手を合わせて、飛び跳ね、部員たちは抱き合って喜ぶ。
北島大先生は、腕を組んで目を閉じ、頷きながら笑っていた。
本当、たかが練習試合がとてもすごい試合になった。
「晋一！いえーい！」
「おう！お疲れ！」
タッチして笑みをこぼす。
「晋一、どうしたんだ？さっきはボーっとしちゃってよー。ビックリしたぜ」
「ああ、悪ィ。さっきそこで…」
柚兎左…。
「そこでどうしたんだ？誰もいねぇけど…って晋一！？」
さっき、柚兎左が立っていた場所に走る。
無論、そこには柚兎左はいなかった。

荷物を持っていたから、校門の方か？
そう思って、今度は校門を目指し全速力で走る。
「はぁ…はぁ…」
何故自分は、柚兎左を追いかけているのだろう。
泣いていた理由を知るためか？
それとも、自分を無視していた理由を聞くためか？
多分、前者に当てはまるだろう。
そして何故、心の中でさっきの柚兎左の泣いた顔が残っているのだろう。
印象的だったからか？
今までそんなに気にしていなかった奴なのに、今じゃアイツのことしか頭にない。

校門に着いたが、柚兎左の姿はどこにもなかった。
「晋一…、どしたんだよ…急に走り出しやがって…。むっちゃ疲れたじゃ…ねぇか…」
陸が追いかけてきた。

俺は、陸の方を振り向かずにただただ校門を見つめていた。

頭に残るは、柚兎左の泣き顔。

本当に、何故俺はこんなに柚兎左のことを考えているんだ？

「意味わかんねぇ…」

強い風が吹き、残り少ない桜の花びらが宙に舞った。

?．試合当日（3）（後書き）

本当に完結できるのかな…（ー＿ー；）

?・早朝（前書き）

更新遅れてますねっ
（。∇。；）
本当にごめんなさいm（＿＿）m

?. 早朝

翌日。
俺は柚兎左に昨日の理由を聞くために早めに学校に来た。
いつも賑やかなB組はしんと静まりかえっている。
こう見ると、五月蠅い教室が恋しく思える。
しかも、春なのにまだ朝は冷えるらしい。
この気温と静けさは、何とも寂しく思える。
鞄を机に置き、イスに座るとひんやりしていた。
「冷てぇ…」
俺の呟きは、虚しく消えた。
ため息をこぼし、教科書を机に入れて内緒で持ってきた携帯を開く。
こう寂しいと、何故か受信メールを読み返してしまう、俺の癖。
女子ならともかく、男子だと少々キモイと自分でも思う。
陸とか女々しいやつめとか言っていた。自覚していてもそれを人に言われると何となくムカつくため、即ボコった。
受信メールのほとんどが陸からで、内容は至ってくだらない。
『時間割教えろ』とか『サッカーの試合見た?』とか『雑談しよーぜー』などなど。

あとは、真広から部活について、直紀から遊びのお誘い、和宏から情報交換など。

そして、少し前に来た柚兎左からのメールもあった。
内容は陸と同じような文。
『時間割教えて（＾－＾；』や『今度の日曜日空いてる？』など。

「はぁー…」

昨日の柚兎左の泣き顔が目に焼き付いていた。

本当に、何故あいつは泣いていたのだろうか。
珍しすぎて、その事しか頭になかった。

昨日ずっと考えても、分からなかった。
それを確かめるために早く来たわけだが、柚兎左どころか誰も来ない。

まさかの今日は学校休みか？
でも一年も二年も来てたし、三年の数人も駅のコンコースで騒いでたし、それはないか…。

携帯を閉じて、席を立つ。

机に置いてある荷物を片手で持ち、教室を出て目の前にあるロッカーに向けて鞄を投げる。

金属が当たる音が廊下で反響する。

鍵を開けて、無理やり鞄を押し込み、鍵をかける。

足音から、ロッカーで作業する音まで全ての音が廊下に響く。

「……」

本当に誰もいない。

何だよ、この虚しさは。

「なーに、湿気た面してんだよ」

振り向くと、陸が通学用鞄とでっかい部活用鞄と共に現れた。

「遅ェよ！」

「お前が早いんだよ！まだ七時半じゃねぇか！登校時間は七時半からだっつーの！」

「あ…マジでか？だから誰もいねーのかよ！」

「当たり前だって…。てか普段遅く来るお前が早いって珍しいじゃねぇか」

「まーな」

会話をしながら、教室に入る。

さっき俺が入ったときより明るい雰囲気だ。

一人でいるより誰かといる方が楽しいんだなと、改めて思った。

結局、朝早く来たというのに柚兎左は学校に来なかった。
担任は風邪と言っていたが、妙に嘘臭かった。

まあ、いいや。

「桜井！ちょっといいか？」
「あ、はい…」
海月と担任は、廊下に出て行って、教室は騒がしくなった。席を立って雑談をしに行く者もいれば、授業の準備をする者もいた。

前者に該当する数人の女子たちが、俺と陸の方に寄ってきた。

「晋一、陸！昨日はお疲れ様！」
「本当スゴかったよ！めっちゃ白熱してたじゃん！」
「二人ともゴールに入れたよね！流石だね～」
「いやー、それほどでもーあるよ」
「何それぇー」
「超ウケるんですけどぉ」

楽しくねぇ…。

陸はノリのいい奴だから、誰とでも楽しく話せる。
俺は結構好き嫌いが激しいから、嫌いな奴とは喋らない。

こいつらはそれ以下。ってか誰だ？

陸は普通に仲良く喋っているが、友達なのか？

陸とは三年間一緒のクラスだったから、陸も知らないはず。

…もしかして、俺の記憶が老化しているのか！？

そう考えていると、いきなり女子が話を振ってきた。

「晋一もそう思わない？」

「ああ」

聞いてなかったし、面倒なので、適当に相槌を打つ。

少ししらけてから、一人の女子が苦笑しながら言う。

「やっぱ柚兎左がいないと盛り上がらないねー」

「うんうん。五月蠅いけど、いないと何か寂しいわー」

「だよなー。てか先生と海月は何話してんだ？」

『さあ…』

最後の言葉は見事に全員がハモった。

しばらくして、海月と先生が戻ってきて授業を開始する。

海月は戻ってきたとき、少し暗い顔をしていたので、後で何を話していたのか聞くことにしよう。

今日は早く起きたため、すごく眠い。
道徳とかサボっても大して支障はないだろう。
俺は頬杖をつき、目を閉じた。

いつの間にか眠っていた。

?. 早朝（後書き）

じ、次回こそは早めに更新を…！

?. 休んだ理由（前書き）

はっはっはー
今回は早めに更新できました（ー＿☆）
結果、内容がぐちゃぐちゃに……

?. 休んだ理由

「海月ー」
「あ、晋一？何？」

昼休みになって、海月に声をかける。

一時間目から寝ていた俺が起きたのは、何故か三時間目の終わった頃。
つまり、昼食の前。

陸に起こされたときはビックリした。
俺としては、一時間目が終わった頃だと思っていたが、陸に言われたのと、黒板に書いてあった数式を見て三時間目まで寝ていたことを知った。

だから、海月には一時間目の放課に聞こうと思ってたのに、弁当を食べ終わってから昼休みに話を聞くことになってしまった。

「朝、先生と話してただろ？何の話だったんだ？」
「…何で？気になる？」
「お前、話し終わって教室入ったら、暗い雰囲気だったぞ？」
「えー…マジっすかぁ…」

海月は片手を額に当てて、大きなため息をつく。
ブツブツ言いながら、どうしようと迷っているらしい。

何か、面倒くさそうだな…。

聞くんじゃなかった…。
と心の奥底で後悔した。
「誰にも言わない？」
「言わねーよ」
「本当に？絶対？言ったら本気で針飲ますからね？」
海月の目は本気だった。
一瞬、身の危険を察知したのか、背中がゾクッとした。
「どうすんの？」
「本当に絶対言いません」
「…ならいいよ。教えたるわ」
海月は俺の制服の端を引っ張っていき、教室の端っこに移動する。
カーテンで身を隠して、小さな声で海月は言った。
「実はさ…、柚兎左のことなんだけどさ…。あの子、本当は風邪じゃないんだって」
「はぁ？じゃあ何なんだ？」
「分かんないけどさ、何か柚兎左のお母さんが休むって連絡入れたとき、変なこと言ってたんだって」
俺が「何を？」と聞こうとすると海月が先に口を開く。
「柚兎左ってどうしたの？風邪ってことでいいわよね？はぁ？インフルエンザ？面倒くさいわね。じゃあ学校にはそう言っとくわ…だって。」

「つまり、柚兎左は元気ってことか」
「そういうこと。でもこれは家庭の事情みたいだから、先生も困ったらしいんだって。ズル休みは良くないってことで、仲のいい私が連絡してみろって言われたんですよー」
「ふぅーん」

一通り分かった。
でも、それと海月が暗いオーラを出していたのとは、あまり関係がない気がする。

「パケット代も考慮してほしいよねー…。あの先生見てると、正直ストレス溜まるし」
「まさか、暗いオーラ出してたのって…」
「出してたかは知らないけど、あの時は先生の加齢臭がずっと臭ってたから。
もう最悪なんですけど…」

海月はキョトンとしてから、苦笑いしながら言った。
確かに、担任は中年で少し臭うが…
そんなことを気にする海月がくだらない……

「今、くだらないって思ったよね…。思いっきり顔に出てんだけど」
「あ、悪ィ」
「否定しないんだ。話すんじゃなかった」
「いや、思ってねぇよ」
「別にいいよ、晋一なら。陸とかならめっちゃムカつくけど」

そう言って、拳を握りしめる。
気のせいだか、血管が浮いているような気がした。

よかった…、俺が俺で。

って意味わかんねーけど。

「とにかく、誰にも言わないでね！別に信用してない訳じゃないんだけどさ」

「分かってるよ。誰にも言わねー。でも何でそこまで秘…」

「ありがとさん！あ、そうだ…綾香ぁ――っ！」

まるで、わざとのように海月は俺の言葉を遮った。

じゃあねと言って、友達のところに走っていく。

そんな様子を見て、俺は不思議に思った。

恐らく、海月は何かを隠している。

直感的にそう思った。

昼休みも終わるし、席に着こうとしたら、教室の後ろの方で海月の叫び声が響いた。

「ぎゃぁ――！陸、さっきの話聞いてたの？超意味分かんないんですけど！」

「ま、いいじゃねぇか！俺と海月の仲だろ？」

「どーいう仲だよ！ざけんな！」

どうやらさっきの話を、陸は聞いていたらしい。ってか盗み聞きか…？

陸は、海月に顔を思い切り蹴られ、さらにアッパーカットを食らう。

「ちょっ！海月さん！？」

「黙れ！人の話を聞くとかマジあり得ないんですけど！どういう神経してんの！」

「情報を進んで知りたいというか、人間の本能…」

「アホぉ――――――！！」

そして、陸はボコボコにされ、力尽きた。

最後に、親指をグッと立て、白い歯を見せた笑顔で言った。

「黒と白の水玉模様…」

「ぎゃぁぁぁぁぁ――――――――――――！！」

陸は本当に力尽きた。

白眼になり、字幕で「ただの屍のようだ」と出そうな痛々しい姿になった。

「勝者、桜井海月ィ――――！」

『きゃああ――！！』

一人の男子が言うと、一部の人に歓声が巻き起こる。

陸は、保険委員により保健室へ連行された。

誰一人、陸の心配をせずに、海月をおだて上げ、騒いでいた。

盛り上がっているのは、一部の人だけで、他の人たちは全く気にせず話していた。

そいつらでさえ、陸の心配をする者はいなかった。

授業を始めようと、担任が教室に入ると、一瞬目を丸くしてから額に手を当てため息とともに呟いた。

「何やっとんだ…おまえ等は……」

今日だけは先生の意見に賛成です。

本当に、B組って何がしたいんでしょうか……。

?．休んだ理由（後書き）

ちなみに、登場人物の名前（ふりがな）

高橋晋一（たかはししんいち）
江川柚兎左（えがわゆうさ）
赤松陸（あかまつりく）
桜井海月（さくらいみつき）
天城直紀（あまぎなおき）
山本和宏（やまもとかずひろ）
小野真広（おのまひろ）

?. 新たな一面（前書き）

内容が意味不明（＾＾；）
私は女子だから、男子がどんなことを話すか分かりません！
そもそも中三はどんなことを話してんだろ…

?. 新たな一面

「大丈夫か？陸…」
「ああ！りゃいじょうふ！（大丈夫！）」

授業が終わり、次の時間が教室移動しなければならないため、移動するついでに保健室に寄ることにした。

「大丈夫じゃないよな…」
「痛々しすぎるぜ…」
「海月には逆らえんな…」

保健室に寄ったのは、俺と直紀と真広と和宏。

陸は、顔に包帯と湿布が貼ってあり、手首にはあざがあった。

「海月も限度というものを知らねえのか？」
「いや、海月は十分手加減してくれたぜ？」
『どこが？』

包帯と湿布と絆創膏だらけな姿を見ると、手加減の欠片もないように見える。

俺たちが問うと、陸はにっこりと笑って言った。

「足は全く攻撃されてねぇんだぜ？サッカーができなくならないように顔だけにしたんだろうよ！」
『……』

正直、俺たちはどう答えればいいのか分からなかった。
ていうか、ただの偶然じゃないかと思う。
多分、直紀たちもそう思っているだろう。
その証拠に、苦笑いをしている。

「てかさ、今思ったんだけどさ」
「何だ？」

真広の言葉に、陸は歯を見せて笑いながら言った。
次の瞬間、陸の笑顔が消えた。

「海月のこと好きだろ？」

「ぬぇぇえ！な、ななな何を仰いますか！？ま、真広ったら～」
「好きなんだな…」

直紀の言葉で、陸の動きはピタッと止まった。
というか、硬直した。

この世界に、こんな分かりやすい性格をしているやつもいるんだな
…。

「なるほどな。だからさっき海月を庇うようなふうに言ったんだな」
「ギクッ」
「じゃあ海月に蹴られて、嬉しかったんだな」
「ギクッ」

「少しムカついても、好きな奴のあれが見えて嬉しい感情に消されたんだな」
「ギクッ」
「蹴られるって分かってて、海月に盗み聞きしてたって言ったんだな…」
「ギクッ」
「Mに目覚めたな」
「うわぁぁぁぁぁ！そうだよ！悪いかよ！俺はあいつが好きだし、蹴られていいって思っちまったし、見えてラッキーって思っちまったんだよぉぉぉぉ！」

陸の叫びが木霊する。
叫び終わると、枕に顔を埋めて再び硬直。

それと同時に、ベッドのカーテンがガバッと開けられ、保険医の石塚先生が眉間にしわを寄せて顔をのぞかせた。

「ちょっと、赤松君、保健室では静かにしなさい」

それだけ言うと、カーテンを閉め、保健室のドアが開閉される音が聞こえたから、石塚先生は出て行ったのだろう。

陸は、何事もなかったように硬直したまま。

言葉の暴力（？）って、すげぇな。

「んじゃあ、俺ら授業受けてくるわ」
「次安田の授業だろ？かったりぃ…」
「先生はほとんど年寄りだからな…。担任もそうだけど、加齢臭がパナイわー」

「じゃーな！」

そう言って、保健室をあとにした。

「って和宏、何書いてんだ？」

和宏は、メモを取り出して、何かをメモしていた。

気になって聞いてみると、辺りを見回してから小さな声で言った。

「陸の好きな奴をメモしてんだよ。これで弱みを一つ握れたぁぜっ！」

「悪趣味だな」

その、出っ張った腹の中はさぞかし黒いことだろう。

友達の新たな一面を知った一日でもあった。

?. 新たな一面（後書き）

月曜日と火曜日に学年末テストがあるので、次は水曜日かな（・∀・）

成績が悪いので頑張らなきゃ！φ（・―・）

?. 本当の理由（前書き）

テスト終わった（^ー^）

てか、熱が出て今日のテスト受けられなかったよ！

私のバカやろー！

あ、柚兎左目線です（，∀、＊）

?. 本当の理由

部屋の中。
両親の叫びが木霊する。
今日は、学校に行くつもりだったのに母親のせいで行けなくなってしまった。

朝早く起きた私は、ちょっと早いけれどたまにはいいかと思って、ダイニングに下りた。
朝っぱらから、両親は口喧嘩をしていた。
理由はいつも単純なこと。
朝帰りとか、経済的なこととか、浮気の疑惑とか、…私のこととか……。

「だいたい、あなたが悪いのよ！」
「お前だって悪いだろう！稼いでやってんだ！口答えするな！」
「半分は私が稼いだ金よ！あなたにどうこう言われる筋合いはないわ！」
「所詮、女という身分を利用して稼いだ金だろう？汚らわしい」

今日は、お金のことでの喧嘩らしい。
発端は知らないけど。

「おはよう」
「おはよう。あんたはお気楽でいいわね」
「柚兎左は何も悪くないだろう。何を当たってんだ」
「当たってなんかいないわよ！ったく…」

母さんの目は、空気を読みなさいとでも言っているようだった。
それに加え、私をゴミのように見ている軽蔑の視線に、私は涙が出そうになる。

何で朝からこんな気分になるのかな。

両親の喧嘩の邪魔をしないように、私は学校に行く準備をする。
靴下とか鍵とかいろいろ身につけて、玄関の方に行こうとしたとき、両親の喧嘩は、かつて類を見ないほどに悪化していた。

前は口喧嘩だけだったのに、今は物を投げ合っている。

お皿とか鏡とかリモコンとか時計とか花瓶とか…。
あらゆる物をお互い投げ合っている。
勿論、子供じゃなく大人が投げているから、物凄い力が加わっている。
投げられた物は、壁や床にたたきつけられ、派手に壊れた。

さすがの私もこれは無視できない…。

学校から帰ったら、靴を履かないと歩けない状態になるまでに、物は破壊されるだろう。

背負っていた鞄を玄関に置いて、両親の方へ走る。

「母さんも父さんも止めてって！やりすぎだっての！」
「五月蠅いわね！クソ餓鬼！」
「柚兎左、下がってなさい。邪魔だ！」

「ちょっと！やりすぎって言って…」
「黙れ！」
そう言って、母親は皿を投げてきた。
柱に隠れて何とか当たらずにすんだ。
皿は、私の隣で叩き割られる。
破片が細かく散らばった。

「もう我慢ならん！ふざけるのも大概にしろ！！」
「ふざけてなんかないわよ！」

父さんは、近くにあった花瓶を母さんに向かって投げる。
それと同時に、母さんもあろうことに包丁を投げた。

二つの物は互いに相殺し、包丁は床に突き刺さり、花瓶は真っ二つに割れた。
その割れた破片は少し大きく、床に落ちて衝撃が伝わったので、さらに細かく割れる。

私は、はーとため息をついてケガをしなかったことに安心した。
とりあえず、私は二人の間に入り、精一杯の大声で言った。
「父さんも母さんも何してんの！？危ないじゃん！」
「五月蠅いわね…」
「柚兎左には関係のないことだ」

二人に軽くあしらわれるけど、そんなもんでは私は折れない。

「関係あるって！毎日毎日喧嘩ばっかでうんざりなんだよ！」
「親にそんな口を利くな！」

そう言って、母さんは思いっきり私の頬を叩いた。

あまりの勢いに私はバランスを崩した。
ガラスの破片の散らばる床に――――。
「きゃぁっ！」

案の定、破片は肌に突き刺さる。
特に、大きな破片が目の近くに刺さる。
大声を出してもこの現状は変わらない。
とりあえず、歯をくいしばって痛みに耐え、起き上がる。
そして、母さんを恨みの念を込めて思いっきり睨む。

「な…何よ…。バランスを崩したあんたが悪いんでしょう！」
「柚兎左…、傷の消毒を」
「父親ぶらないで。隣に病院あるんだから、そこで手当してもらう」
「藤本さんのところは、まだ開いていないだろう。迷惑をかけてはいけない」

迷惑をかけてはいけない

その言葉は、私を怒りに導いた。
ため込んでいた感情が溢れ出すような感じがした。
もうケガしてんだから、いくら傷が増えようと大したことない。
思いっきり息を吸い込んで、思ったことを怒りのまま言う。

「迷惑をかけてはいけないだって？じゃあ、私には迷惑かけていいわけ？毎度毎度でけぇ声で喧嘩しやがってよ！耳に悪い上、近所の奴らの視線が痛いんだよ！気付いてねぇと思うけど、あんたらの声、丸聞こえだかんな！」

「何！？」

父さんが、目を見開いて驚愕しているのが分かる。

こんな一言じゃ、私の怒りは治まらない。

そのまま続けて言った。

「あんたらさ、会社のお偉いさんとか近所とかで仲のいい夫婦気取って、媚び売ってるけど、みんな気づいてんだかんな！無理してるって！中三にもなって、柚兎左ちゃんは偉いわねぇとか言われて見ろ！どんだけ恥ずかしいか！」

「黙りなさい！親に何て口利いてんの！誰のお陰で生きてこられたか分かってるわけ！？」

「まともに世話してもらった覚えはない。何母親気取ってんの？」

もう壊れようが、殺されようがどうだっていい。

言いたいことがいえれば、それだけでいい。

「このクソ餓鬼！」

再び平手打ちをされる。

床に倒れ、傷が増える。

全く…、折角の可愛い顔が台無しだっての。

「もういい。今日は学校休む。藤本さんのところ行ってくる」

「あっ！ちょっと待ちなさい！」

母さんを無視して、私は立ち上がり、フラフラと不安定な足取りで玄関へ行った。

頬や目、脹脛に太もも、手のひらに手首に腕、肌の出ていた全てに破片が傷を作った。

足の裏も、靴下だったから破片が食い込んで、私が歩いた後を赤く表している。

全身傷だらけ。

体中痛い。

何で歩けるんだろう。

何で私がこんな目に遭うんだろう。

何で私は生きてるんだろう。

この姿を友達がみたら、どういう反応をするかな。

海月は心配してくれるかな。

私に本当の友達っているのかな。

上っ面の友達しかいない気がする。

色々なことが思い浮かぶけど、その前に、どう説明しようかな。

この傷……

私は、ローファーを履いて、外に出る。

こんな醜い姿を見られたくないからさっさと行きたいけど、痛くて

走れない。
とにかく、隣の藤本さんのところで手当してもらおうと、動かない足を無理やり動かした。

?. 本当の理由（後書き）

本当に私テストどうなんのかな？
期末だぞ…、国語と数学と理科だぞ…、重要科目だぞ…（泣）

??・優しい兄貴（前書き）

風邪引いた…ぐずっ（;´д`）

ちきしょー…声出ねー…

柚兎左目線ッス（^ー^）

??・優しい兄貴

「柚兎左ちゃん…、こんなに大ケガして…。どうしたの？」
「すみません。藤本さんしか頼れる人いなくて…。お金はきちんと払います。おいくらですか？」

私は、制服のポケットから財布を取りだし、中のお札を覗かせた。
中はざっと二万円くらい。
母親の財布から少しずつ抜き出したから全部千円札。
藤本さんは、恐らく私のお金と思ってるのだろう。
慌てた様子で首を横に振る。

「いいよいいよ！いつも息子がお世話になってるんだから、このくらい…」
「いえ、そういうわけにはいきません。それに、お世話になってるのは私の方です。勉強教えてもらったり、相談相手になってもらったり…」
「いいんだよ。それよりこんな時間に大丈夫なのかい？」

現時刻は七時半。

父親の言うとおり迷惑だと思ったけど、私が言ったとおり、頼れるのは藤本さんくらいなのだ。
学校は休むって言ったけど、ちゃんと連絡してくれるのだろうか。
全く…、藤本さんの家に生まれたら、きっと充実した生活を送れた

だろう。

みんなが言うように、子供は親を選べない。
人というものは不平等だ。

そう考えていると、いきなり病室の扉が勢いよく開けられた。

「久しぶりだな、柚兎左ぁ……って、どうしたんだよ！？その傷！」

「京介…！！」

「転んだのか？誰かにやられたのか？誰だ？俺が冥土に送ってやらぁ…」

「あー…自分で滑っただけ」

ていうか、京介の目が本気だよ！
瞳孔開いてるし。

ちなみに、今入ってきたのは藤本さんの一人息子、藤本京介（ふじもとけいすけ）。

大学生で、私としては兄みたいな存在だ。

知り合ったのは最近だし、年上だけど呼び捨てで名前を呼べるほど仲がいい。
――と思ってるのは私だけかもしれないけど

「どこで転んだらこうなんだよ…。ガラスの破片かぁ？これ…」

「あは…は。花瓶とお皿の破片で……」

「…そうか。無理せず俺に相談しろよな。バレねぇように抹殺して

くっから」
「犯罪だけは起こさないでよね」
「……ぉ、起こさねえよ！」
「今の間は何？てか何で目をそらすの！？」
「医者になるやつが怪我させてどうするんだ…。本当にコイツは医学部なのか？」

藤本さんは、手を額に当て首を横に振った。
まるで呆れているみたいだった。
いや、完璧に呆れていた。

「京介…学校は？」
「今日は休み。てか柚兎左は学校遅刻じゃねえか？」
「……今日は、休む」

行く気力がない。

中三だし受験がどーのこーのって言うのは分かってる。
でも、何となく高校なんか行かなくていいんじゃないかなって思う。
いや、だめだけどさ。

「終わったよ」
「帰るか？」
「やだ。帰りたくない。コンビニ行く。ジャ○プ立ち読みする」
「補導されっぞ」
「両親（あいつら）が恥かくだけ。私は関係ないし」

警察共に無様に謝ればいいんだわ。

京介はしばらく何かを考える素振りを見せ、黙った。

そして、一瞬動きが止まったと思いきや、私の方を見た。
「……その傷親につけられたのか？」
真剣な眼差しを向けられたから、嘘をつくことはできなかった。
まあ、黙ってる理由なんかないから、嘘つく必要もない。
「そうだけど」
素っ気なく返す。
真剣な表情のまま、私から藤本さんに目線を移す。
「親父。柚兎左を家に泊めていいよな？」
何でそういうことになるの？
いや、嬉しいけどさ。
申し訳ないじゃん。
「柚兎左ちゃん、今日はうちにお泊まりしよう」
「え…でも」
「君の両親をひどく言うようで悪いけど、家に帰ったらまた傷が増えるんじゃないかな？全身傷だらけにされて、普通に過ごせないだろう？」
「……いいんですか？」
「いいとも。ぜひ、泊まってくれ」
こんなに有り難いことはない。

てか、思惑通りって感じだ。
「お世話になります」
そう言って頭を下げる。
体を少し動かすだけで痛みが走った。
治るのかな？この傷は
「柚兎左、来いよ」
「あ？どこに？」
「俺ん部屋。読むんだろ？本」
「読む！藤本さん、手当から何まで本当にありがとうございます！！」
座っていたイスから立ち、お辞儀をしてから京介の後に続いた。

「えーと…この辺に専用本棚が…」
「雑誌だらけだね。単行本はないし」
「単行本は柚兎左がいっぱい持ってんだろ？今何冊だ？」
「約三百…いや、四百か？」

「破産しねぇのかよ……」
「しない。十八禁もあるけど読む？」
「読まねーよ！！ほら、今週号」
私は京介から本を受け取ると、彼のベッドに座って読み始める。
やっぱマンガは神だわ…
読んでるだけで幸せ…
「うわー……えぇ…マジかよぉ…」
自然と感想が口からでる。
「……柚兎左…とりあえず、がに股はやめよーぜ？制服丈長ェけどさ。女としてその格好は……」
女として……
私は本を閉じて、京介を見る。
「ねぇ…。私って存在意義あんのかな？正直言うと、自分はいらない人間のような気がする。よく、神は必要のないものは生み出さないって言うけど、神としては人間を生み出したことが最大の過ちだって先生がボヤいてた。世界に、自然界に後見してる人を過ちなら、私はそれ以下の…がらくた（ジャンク）。綺麗事じゃ私は救われない、誰かに殺してもらった方がずっと楽で救われた気分になると思うんだ」
「……そういやー、おまえは綺麗事が嫌いだったな」
「綺麗事並べたって、何にもならない。所詮、その場の慰めにしかならない」

京介は、困った顔をして頭をボリボリ掻く。
困らせること言っちゃったのか。
ここは謝るべきかな。

「ごめん、今の話忘れて」
「んな、すぐに忘れられねぇよ。柚兎左の悩み、俺が解決してやっから」
「……かっこつけ。解決できる訳ないじゃん」
「お前なぁ……俺なりに「でもさ！」？」
「ありがとう、ね……」

精一杯の笑顔を作り言った。

京介は、そっぽを向いて「ああ」と言い、部屋から出て行った。

私も、雑誌のページをパラパラめくって、先ほど読んでいたところを探して、読書を再開する。

「無理しやがって……」
「お兄ちゃん」

そんな京介と私の呟きは誰にも聞こえることなく消えた。

??・優しい兄貴（後書き）

そういえば、所々に名古屋弁が混じってますね（^^;）
申し訳ございません＞（＿＿）＜

??・一つの後悔（前書き）

回想みたいな…思い出って言うのかな？
んー…まあ、読んでみれば分かるっしょw
てか晋一（主人公）が出てないな～…　あはっ☆

??・一つの後悔

———あなたの夢を見た
あなたと私が笑いあってる
幸せな夢
所詮夢だから
儚く消えた
この後悔は
いつになったら消える？
あなたには
もう会えないの？———

小学校二年生。

それが私が初めてあなたに出会ったとき。
正直言うと、顔がよかった。
ただそれだけの理由であなたに惚れた。
つまり一目惚れ。

それなりに仲が良くなった。
友達としてだけど。
話し相手としてだけど、それでもあなたと関わりがもてて嬉しかった。

三年生も四年生も同じクラスで嬉しくて神様に土下座してお礼を言った。
四年生では同じ班になれて、給食中ずっとおしゃべりしてた。

四年生のある日のこと。
あなたと仲のいい安田くんが、あなたが私のことを好きって言ってきた。
驚いたし、嬉しかった。
でも、嘘かなって思って、気持ちとは裏腹に意地張って「そう」とあしらった。

今思えば、安田くんに「私も好きなんだ」って素直に言っていたら…、あなたに告白していたら、あなたと恋人関係になれたのかな？

生まれて初めて作ったバレンタインチョコ。

受け取ってくれただけで嬉しかったのに、お返しに飴までくれた。

勿体なくて食べられなかったよ。

六年生。

五年生で一緒のクラスになれなかったから、六年生でなれるなんて夢にも思ってなかった。

一年のブランクで若干想いが薄れてたから他の人を好きになってみた。

でも無理だった。

頭にはあなたしかなかったから。

最後の席替え。

一生懸命祈った。

あなたの隣の席になりたい。

結果、隣にはなれなかったけれど、あなは私の前の席だった。

嬉しすぎて涙がでた。

席替えのお陰で、かなり距離が縮まったような気がした。

家庭科の調理実習の時間が給食前で、おなかがいっぱいだからという理由で、あなたの残りを頂いた。

私も同じ物を食べたのに、こんなにも味が違って美味しかった。

私の隣の人はあなたと仲のいい奴で、そいつが一日だけ前の方の席に行って後ろは私だけになった。

私は一番後ろの一番廊下側だったから話し相手はあなたと、あなたの隣の席のあまり話さない女子。

ちなみにその女子の名前は雅(みやび)。

雅は私の方を向いて話しかけてくれるって確信してたけど、あなたも私に話しかけてくれた。

雅よりもたくさん。

嬉しくてたまらなかった。

バレンタインチョコ。

去年は渡せなかったから、今年は気合いを入れてトリュフというも

のを作ってみた。

バレンタインの次の日に、チョコについて話しているとあなたと仲のいい友達パート二が「俺にもちょうだい」と言った。

あなたは、私を指さして「こいつのチョコむっちゃうめーよ！」と言ってくれた。

この瞬間が今までで一番嬉しかった。

ホワイトデーのお返しは、また飴。

今年は結構高そうだった。

みんな同じ物を貰ってたから、私はもう一つ。

世界に一つだけしかない物をあなたから貰った。

教室に飾ってあった絵。

正直上手ではないけれど、可愛くて気に入った。

だから、勇気を振り絞ってその絵が欲しいとおねだりをした。

私にできないことはないから、その絵はきちんともらい受けた。

マンガを貸してあげたり、一緒に遊んだり、お話したり……

恋ってこんなに楽しいんだ。

そう思ったけれど、卒業式というイベントが近づくにつれ、寂しさがこみ上げた。

あなたは公立。

私は国立の中学へ進学する。
つまりは会える確率がかなり低くなるということ。

卒業式当日。

告白しようかなって思ったけれど、できなかった。

チャンスはいくらでもあった。

卒業式の後に謝恩会というものをやったから、そのときにでもやればよかった。

たった一言…。

「好き」の一言がいえなかった。

理由は単純。
勇気がでなかった。

そのままあなたと会うことはなかった。

中一になってから、激しく後悔が押し寄せた。

絵を見ては涙を流し、アルバムであなたの顔を見れば、小学校生活が走馬灯のように蘇った。

告白すれば、こんな後悔はしなかった。
吹っ切れることもできずに、あなたは私のことどう思っていたのかな？って未練ダラダラ。
四年生の言葉は本当だったのかな？
心の奥底では私を嫌ってて、仕方なく友達を演じてたのかな？
それもこれも、一言いえば分かったことなのに。

死にたくなった。
弱虫すぎる自分を呪った。
自己嫌悪になった。
恋というものが分からなくなった。
涙を流す日が増えた。
後悔がこんなにも辛いと、時間を巻き戻せないかと何度も思った。

初恋は叶わない。
そんなの分かってる。
でも、彼は初恋じゃない。

中学三年になった今でも、あなたを未練がましく想っている。
私に好意を寄せてくれる、物好きな人は何人もいた。
でも、どうやってもその人たちを好きになることはできなかった。

どんなにかっこよくても、どんなに優しくても、どんなにお金持ち
でも、どんなに私を好きになってもらっても、私の頭にはあなたし
かいないし、好きという感情はあなたにしか向かない。

溢れる涙は、いつになったら止まるのだろう。
この後悔は、いつになったら消えるのだろう。
あなたにはいつ出会えるのだろう。
今なら何度でも言えるよ。
勇気も出せるよ。
あの時は苗字で呼んでたけど、あえて名前で呼ぶよ。
真っ黒な黒一面に、銀色（シルバー）の宝石が飛び散ったような星空。
月までも白く輝いていた。
私はそんな夜空に向かって、あなたに会えたら言う言葉を呟いた。

「好きだよ……功太」

涙と一緒に後悔がまた押し寄せた。

??・一つの後悔（後書き）

明日は学校か……
一週間ぶりなのだ☆

次回は明日かな…
どうでもいいって？
まあ、そう言わずに…

??. 変貌（前書き）

雪だーゞ（^▽^）ノ
大粒だったから積もったぜーゝ（≧≦▽≦≧）／

??・変貌

柚兎左が学校に来たのは、試合から一週間後。

傷だらけで、そこら中に包帯が巻かれたり、絆創膏が貼られたりと実に痛々しい姿で登校してきた。

クラスメート全員が驚愕した。

傷だらけのクセして、いつも通りの雰囲気。

傷のことについて聞いてみれば、転んだと話を逸らされる。

海月に話を聞いても、「うちにも分からない…。どうなってんの？こんなの初めてなんですけど」と驚いた様子だった。

もう、泣いた理由とかより傷の理由の方が知りたい。

両方とも教えてくれないだろうが、一応聞いてみるとしよう。

一人では気が引けるため、ムードメーカーで楽観的な陸をつれて、柚兎左の席の真正面に立った。

「ゆ、柚兎左。その傷どうしたんだ？」

「え？転んだらこうなった」

「転んだって……」

「話はそれだけ？」

冷ややかな眼差しと、冷たい言葉。

この空気…耐えられる奴は俺の隣にいる脳天気野郎の陸しかいない

だろう。

目線を送ってみると、通じたようで空気を和らげようと柚兎左に話し始めた。

「てかどう転んだんだよ！俺でもそこまで傷つかねーぞ！」

「ガラスの破片が散らばってたからこうなった」

「ガラスぅ！？災難だったなぁ！女の肌にゃ傷はつけちゃいけねぇってのに」

言い方が酔っぱらったオヤジ臭いと思うのは俺だけだろうか。

「だよね…。最悪だっての」

「嫁のもらい手がなくなったら俺のところに来いよ！俺がもらってやる」

さり気なくプロポーズしたな。

柚兎左は嫌だという表情（かお）をして鼻で笑い、若干表情が和らぐ。

「そりゃどーも。猿でもいいこと言うじゃん」

雰囲気も和らかくなり、張りつめたプレッシャーもなくなる。

改めて思う。

脳天気とは素晴らしい。

脳天気は世界を救う。

「猿ぅ！？」

「なに驚いてんだよ…。そっくりじゃんか」

「マジでぇ！？晋一もそう思ってたりすんの？」

「瓜二つじゃね？」

「まぁじぃでぇ！海月もそう思っちゃったり？」

陸は近くにいた海月に問う。

海月は機嫌を損ねたのか、眉間に皺を寄せて、陸を睨む。

「うっさい！猿！」

「…ぐずっ…俺泣いていい？」

「存分に泣」

『却下！便所で泣いてこい』

「らしい」

「……うがぁぁぁぁぁぁ！」

俺は存分に泣けと言うつもりだったが、海月と柚兎左が声を揃えて冷たく言い放った。

二人のその軽蔑の視線は、不良の頂点（トップ）でさえも土下座して謝るだろうってほど恐ろしく、迫力があった。

陸はおそらく男子便所に一直線だろう。

泣きにではないと思う。

ノリで行ったんじゃないか？

「あはは！赤松君戻ってきなよ！」

『赤松君！？』

「どうかした？」

柚兎左の周り…、少なくとも今の言葉を聞いた人たちが柚兎左の言葉を復唱した。

陸も教室の扉を勢いよく開けて、みんなと同じく復唱した。

どんな連携だよってほど、きれいに重なった声であった。
柚兎左は一人訳が分からずに困惑しているようだった。
「おまえ頭ぶっ壊れたか？」
「どうして？高橋君」
『高橋君！？』
またもや声が重なる。
柚兎左が苗字で呼び、尚且つ君付けなんてびっくり仰天だ。
いや、いきなり呼び方が変われば誰だってびっくりするだろう。
こいつが苗字呼びするのは、嫌いな奴と先生と気にくわない先輩。
つまり嫌われた…という認識を俺たちはしてしまう。
「ゆ、柚兎左。クラスの男子を全員言ってみ？」
「えっと、赤松君、天城君、伊東君、小野君……」
番号順に男子の名前を言っていくが、全員苗字呼び。
つまり全員嫌ってるのか？こいつは…
「矢野君、山本くん、渡辺くん…。で？」
「うん……。ちなみに女子の一から五番の人は？」
「麻耶、奈々子、朱美、私、由利歩」
「……」
結果、男子は全員苗字呼び＋君付け。
女子は名前で呼び捨て。

どうなってんだ？

「……晋一、陸、ついでに真広！Ｄ組行くよ！早く来る」
「ああ…」
「おう！」
「何で俺も巻き込まれんだよ！」
「何か文句ある？」
「あるっつーの！俺にはかんけーねぇ」
「うちら友達でしょ？」
「そういう意味の関係じゃなくてだな！」
「うっさい。来いっつったら来い」

強制的に真広を連行し、俺は若干面倒くさいと思いながら、陸はノリノリで海月の後に続いて、Ｄ組に向かった。

今更だが、こうなったことを激しく後悔中。

何でかって？
面倒くさそうだからだ。
何か直感的に、変なことに巻き込まれたような気がした。

??・変貌（後書き）

最近学校がつまらない悩み。
疲れるし暇だし……
はあぁぁぁぁぁ（、□、；）

??. 過去と理由（前書き）

今回は〇〇〇の過去を〇〇が話す感じです（，∀、）

何かノリで書いたら長くなった（^ー^）

久しぶりに主人公登場！

??・過去と理由

「そこの男子！美桜を呼びなさい」
「はぁ？川崎？」
「呼べっつってんの！早く」
「へいっ！川崎！桜井が呼んどる」

D組にて。
教室に着いたら、付近で戯れていた男子に命令して、川崎美桜（かわさきみお）というやつを呼ばせた。

真広に対して怒っているのか、口調は女王様な命令口調。
それに加え、鋭く冷ややかな目で言うから、海月に逆らえる奴はいないだろう。

いたら、勇者として讃えてやろう。

奥から出てきた、髪がボワッという感じに癖のついた、全体的にほっそりとした女子がこちらの方に来た。

「海月ー！どうしたの？てか、その三人は……？」
「友達」
「それは見て分かるから！」

川崎がすかさずツッコんだ。

ここは名前でも言っとけばいいのか？

「高橋晋一」
「赤松陸っ！」
「…小野真広」

とりあえず名前を言うと、続いて陸と真広も自分の名前を述べた。

「真広は私の僕」
「海月…柚兎左みたいなこと言うね」
「海月、こいつぁ誰だ？」
「真広って口悪いよな…」
「川崎美桜。柚兎左と同じ小学校出身で私の友達」
「ちわーっす！川崎でーす」

ハイテンションだな…こいつが第一印象のソプラノ声の女子。

何となく海月がD組に来た理由が分かったような気がした。

「早速なんだけどさ、柚兎左が変なんだって……」
「あの子は元々変でしょ」
「美桜の方が変だって…。じゃなくて、本当おかしいんだって！」
「どんな風に？」
「何かいきなり休んじゃうしさ……」

と一週間前のことから丁寧に川崎に説明すること三分。

聞くのも面倒くさいんで、三人で世間話をしていた。

「ってわけよー！おかしくない？」
「男子をねぇー…。恋愛的なもんじゃないの？好きな人以外は苗字ーとかさ」

一々振り付けまでして話す川崎。
確かにこいつは変人だなと思う。

陸は目で「柚兎左の好きな人って誰だ？」と言っていた。
「さあな」と目線で返す。
正直むちゃくちゃ気になる。
なぜかは分からないが。

真広も目で「B組じゃねーことは確かだな」と言った。
全員苗字呼びだからかと自分で理解する。
…何となく悲しい気分になったのは何故だ？

「柚兎左は好きな人いないってー！」
「確信あんのか？」

陸が問うと、海月は真顔で
「だって好きな人いるもん」
と言った。

「矛盾してるぞ」

俺がツッコむと、海月は頭を掻きながら考えているような素振りを見せた。

「うーとね…。今までもずっと好きな人いたけど、普通に名前呼びだったってこと」
「あれ！知ってるの？」

「名前は知らないけど、小学校の頃から好きだって」
「あっ、名前は知らないんだ」
「美桜は知ってるの？」
「知ってるけど…話していいのかな？」
「秘密にするから！ねっ！晋一、陸、真広！」
『ああ』

声を揃えて言う。
ていうか、海月の目は秘密にしろと脅しているようだった。
もうガールズトークみたいになっているから、会話に割り込む気にもなれない俺たちは静かに美桜の話を聞くことにした。

「二年生だっけなー…。そのときに一目惚れってやつをして、四年生で本格的に好きになったみたい。私が転入する前だからよくは分かんないけどさ」
「名前！」
「…柏木功太。野球とサッカーと陸上を掛け持ちしてた運動バカなんだよねー」

掛け持ちといえば、カラオケの時に俺が話したことだ。
その柏木功太とかいうやつと同じような感じだったから、あの時雰囲気が変わったのか？

「四年生の時、好きってあいつの友達から言われたけど冗談だと思って軽く流したわけよ。まあ、そのことに関してはあまり関係ないんだけどね。六年で同じクラスになれてかなり仲良くなったわけよ。誰がどっから見ても柚兎左は柏木が好きって分かるほどさ」

「ふーん…告白したわけ？」
「しなかったって。フられるのが怖くてできなかったって。そっから後悔しまくってさ……。何で告白しなかったとかで泣くし。柏木と会える確率がある年に四回のお祭りは、二回は野外学習と重なって二年連続行けなかったらしいし、残り二回は柏木が行かなかったらしい」
「会いたくても会えず、告りたくても告れず。未練ダラダラってわけか…。最悪じゃん」
「吹っ切れることもできずにさ…あいつに貰った絵を待ち受けにして眺めては悲しそうな顔する訳よ…。だからあんまり触れなかったんだけど」

この場に俺たちはいていいのだろうか…

正直、重すぎるこの空気から逃げ出したい。

逃げようとすれば海月が睨むし、口を挟める瞬間はないしで、最悪だ。

「この中に野球部かサッカー部のやついる？」

いきなり振ってきたことにまずは肩＋心臓が飛び跳ねた。

さっきまでの若干低い声も元に戻ってるし…。

とりあえず、誰も答えようとしないから俺が答えよう。

「俺たち三人ともサッカー部だ」
「どぅわー…マジっすか」

もしかしたら、泣いていた理由も川崎に聞けば分かるのか？

「美桜も見たでしょ？試合」

「あ、そういえば晋一君と陸君がいたね！柚兎左が見てなくて良かったよー！あの時とそっくりだから」

「あの時っていつだ？」

「小六の春に学校でやった試合。点数も同じで私たちの学校が負けてたときに点を入れたのが柏木だったんだよ」

「フラッシュバックでもしたのか？」

「何が？」

「試合のときに、柚兎左は泣きながら試合を観てた」

「あちゃー…思い出したんだねー」

俺と柏木とかいう奴を重ねていたのか？

どういう奴だったのだろう。

「私よりも沙由李の方が詳しいし、聞いとくよ」

「お願い」

「いや、いいだろ。それだけ分かりゃ」

「……分かった。ありがとね。美桜」

そう言って、海月は微笑む。

川崎も微笑むと、絶対秘密にしてと手を合わせてお願いしてきた。

もちろん、秘密にすると約束した。

知った後で遅いが、軽くプライバシーの侵害してないか？と思ったが、海月が友達だから支障はないと流した。

時計を見ると二十分くらい経っていて、休み時間も終わりを告げようとしていた。
…のは三分前のことで、授業に遅刻した俺たちであった。

??・過去と理由（後書き）

明日合唱祭だぁぁぁ！
嫌じゃー…

ストックが切れたので、明日は更新できるか五分五分……

??・ミニ作戦会議！（前書き）

遅くなってすみません＞（＿＿）＜

久しぶりの投稿！

……のクセしてつまらない駄文（＿＿；）

しかも短い！！

??・ミニ作戦会議！

人というのは、こんな短時間で変わってしまうのか。
それとも、遅めの反抗期なのか。
真相は解けることはなかった。

＊

変わった。
俺でも変わろうと思っても、変わることができなかった。
陸も真広も海月も変わることはできないだろう。
“性格”というものは。
誰が変わったかは言うまでもないだろう。
無論、柚兎左だ。
彼女は、一言で言うと明るいと言える。
フレンドリーで誰からも好かれるってことはなかったが、広く浅くたくさんの友達がいた。

心は広くないものの、何でもふざけるような軽いお気楽な奴で、しんみりした空気も自分に関係がなかったら笑い飛ばすような。所謂、ムードメーカーだった。

そして、思ったことはすぐ口に出す。
ある意味これは変わっていない。

「陸…どーするよ」
「ああ…。このプリント、柚兎左に渡す＋説明……俺もあの一件がトラウマになっちまった」
「うちのせい！？」
「いっ、いや！み、みみ海月は悪くねぇよ！」

これが惚れたというものか……
素晴らしいくらいかばってるな。

昨日、またしても休んだ柚兎左は、今日は学校に来た。

昨日、担任が海月にプリントを渡して説明をしといて欲しい。と言ったそうだ。

海月は内申の関係で、渋々と承諾した。

と言うわけで、今日そのプリントを渡そうと思ったのだが、雰囲気が違う柚兎左に近寄りがたい。

それだけのことで、海月は一昨日川崎と話したメンバーを集め、手伝って欲しいとのこと。

正直、俺たちも柚兎左にダークオーラを感じ、近寄りたくなかった。
本能的にやばいと感じたらしい。
つまり、誰も行きたくないから同胞で只今作戦会議中だ。
「ジャンケンで決めっか？」
「真広……そんな運で人生を選択するのか！？」
「じゃあ代案を考えろよ」
「あみだくじ」
『それ、ジャンケン以上に運が左右するじゃん！』
そんなこんなでどうしようか本気で迷っていた。
自分が負けるのを恐れ、どんな案も即却下。
「総隊員！あれ見て！」
海月が指さすのは柚兎左の席の方。
見ると、女子二人が柚兎左に話しかけようとしていた。
何かを話してたようで、一人が柚兎左に同意を求めた。
「ねぇ！柚兎左！」
「何が？」
「えっと……担任マジうざくない？」
「はぁ？どーでもいいし」
「あ……はい。ごめん」
「何で謝るわけ？あんたたち何か悪いことでもしたの？」
「別に、そうじゃないけど」

「柚兎左、怒ってるみたいだから……」
「ふーん……あっそ。で？」
明らかに冷めた態度。
女子二人を見る目は、まるでゴミを見るように鋭い。
女子たちは涙目になり、逃げるように廊下に出た。

『近寄れねー』

声をそろえて、みんな呟いた。

そりゃ、あんな仕打ちが待ってるなら近寄りがたい。
陸のような軽いトラウマならいいが、あんな視線で睨まれたら正直精神が持つか五分五分だ。

ヘタレ？
いや、どんな男子でも無理だと思う。

いつも、キャーキャー言ってる明るい奴が、いきなり人を殺す視線…所謂殺気を自分に向けられたら、ギャップというものがかなりヤバい。

近寄れる奴は俺と陸が勇者様として讃えよう。

「真広、お願い」
「何で俺なんだよ！」
「だってあんた、度胸あるじゃん。ついでにヤンキーだし」
「ヤンキーじゃねぇよ！！てか、度胸あったって怖ぇもんは怖ぇ！」
「……」

海月は、まるで役立たずという視線を送っている。
まあ、陸でさえも前回撃沈したくらいだから、真広も無理だろう。
というか、キレやすい真広とキレ気味の柚兎左が話したら、教室が半壊するほどの喧嘩がまき起こるだろう。
それだけは、俺としては避けたい。

「なぁー、どうするよ！チャンスは今しかないぜ？柚兎左帰んの早いし……」
「！私いいこと思い付いた！」
『そうか』

海月のことだ。
ろくなことを言わないだろう。

陸でさえも、海月の考えに耳を傾けようとしなかった。
それでも、自分では名案だと思ったのだろう。
誰も聞いていないが、持論を語り始めた。

「手紙とか付箋を付けて置いとけば、柚兎左も分かるっしょ！いい案でしょ！うち、スゴくない？」
「あー、すごいな……」
「さすが海月だなー」
「じゃ、それで行こう」
「何か私、貶されてる？」

真広、陸、俺の順で言ったところ、海月は複雑な表情をした。

「で、誰が書くの？」

「海月だろ」
「無理無理無理！！筆跡分かりやすいんだからね！うちの字」
「じゃ、あまり癖のない晋一くんで」
「何でだよ！」

口論の末、野球選手のポスターを譲ってくれるらしいから、仕方なく引き受けることにした。

文章はみんなで考え、移動教室の時にさり気なく柚兎左の机に置き、何事もなく去った。

任務が終わると、何故か陸たちに誉められ、讃えられた。

?.?.・ミニ作戦会議！（後書き）

うん、意味わかんないですねw
何か矛盾してない？って思います……ハイ（^^;;;

??・壊れた瞬間（前書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！

ほんっっっっと申し訳ございません！！

めっちゃ更新遅れました＞（＿＿）＜

ネタが思いつかなかったもんで……

??. 壊れた瞬間

「ねぇ、どういうつもり？」

下校途中、鋭い少女の声に一瞬肩が跳ね上がる。
振り向くと、柚兎左がとんでもない形相でこちらを睨みつけていた。
それに若干怯みながらも、俺には何のことだか分からないため、問う。

「何のことだよ……」
「プリント。高橋君でしょ？メモみたいの書いたの」
「ああ…そうだけど」

いきなり出てきた冷や汗が頬を伝う。

駅のコンコースでの会話。

行き交う人々は、この雰囲気を察して、妙に避けて歩いている。
そのせいで、さらに緊張感が高まる。

「どうして手紙な訳？」
「え……あ、ああ」
「口じゃダメなの？あんなにだらだら書いてさ」
「別に……ダメじゃねぇけどさ」
「じゃあ何で？私が嫌いならそう言えばいいでしょ？」

言えるわけがないだろう。

雰囲気が変わったせいで、怖くて話しかけづらかった…なんて。
身長は俺の方が高いから、柚兎左が少し見上げる形になる。
本来なら上目遣いというものでドキドキするらしいが、顔の向きは真っ直ぐ、傾けることなく、目だけが俺の方を見ている。
ヤクザかなんかにガン見されてる感じだ。
違う意味でドキドキだ。
「何で黙ってんの？私難しいこと聞いてないよね？あ、私には言えないこと？」
何故この状況になった？
こうなることを分かっていて陸は俺を誉め讃えたのか？
「何で書いたの俺だと思った？」
何となく気になったことを言ってみる。
「字見れば分かるし。ていうか、あんな濃く書くのは高橋君くらいでしょ。赤松君とも良い勝負か」
即答する。
しかも、どこか棘のある言葉で。
とりあえず、俺なりに空気を和ませようと頑張ってみる。
「そこまで濃くねーよ」
「そうかもしれないけど、とりあえず字からして高橋君だって分か

った」
「そ、そうか！すげーな」
「そりゃ、長くて短い付き合いだし」

一言…、怖っ！！
凄まじい迫力だ。
ただでさえ睨んだら怖い柚兎左がマジで睨むと心臓を射抜かれる勢いだ。

「柚兎左」
「何？」
「お前…何か変だぞ？何かあったか？」
「……」

一瞬、時が止まったかのように動きが静止する。
俺、マズいこと言ったか？と思いながらも柚兎左を見る。

俯いた顔を上げ、狂ったような笑みを浮かべた。

「別に……私は普通だよ」
「普通じゃない奴はそう言うんだよ」
「じゃあ普通じゃないって言ったら普通なの？」
「それは……」
「ふふ…だから、私は普通だよ」

そう言って、さらに不敵な笑みを浮かべる柚兎左に、俺は恐怖を覚える。

こいつはこんなに怖い笑い方をしていたか？
こんなに怖い顔をしていたか？

何でこうなったんだよ…。

前は明るくて五月蠅くて時々ウザいと思ったが、いい笑顔をしていた。

変わったのは今日なのに、あの笑顔が懐かしく思える。

「だから」

「……？」

「もう話しかけないでね」

「柚兎」

「晋一は私のこと嫌いなんでしょ？もういいよ。無理しなくてさ。そういうことがどれだけ傷つくか分からないでしょ？すごく怖いから」

「違う」

「じゃあ何で話しかけてくれなかったの！？話したくなかったからでしょ！？」

「それは……」

「正直悲しかった。被害妄想だし自己中だって分かってる！けど」

そこで気付いた。

壊れた笑顔でも、怖い顔で睨んでる顔でもなく、いつもの柚兎（かお）左だということに。

周りの人から見れば、カップルが喧嘩してるようにでも見えるのだろう。

空気を読んで、俺たちを避けている。

その為、コンコースはほぼ無人。

叫び声に似た声がよく響く。

「もういい」

「は？何言って……」

「嫌いな人と喋っていたくないでしょ？もう近づかないから…」

違う。

嫌いじゃない。

そんな言葉が出てこない。

そして、柚兎左に対する気持ちを聞かれてから、改めて気付いた。

俺は柚兎左が好き。

多分これが恋なんだろう。

よく分からないが、母さんや友達に抱く感情とは少し違う。

壊れていく柚兎左を見てられない。

でも、俺は何も言えない。

何とも情けない。自分に殺意がわいてくる。

「何も、言ってくれないんだね……」

「柚兎左」

「もういいよ……。慰めの一つや二つくれるかって思ってたのに。

自惚れだったんだね」

「……悪ィ」
「悪いって思うんなら何か言って欲しかった。そしたら、私は私のままでいれたのに」
「ごめん」
「……」

謝ることしかできない。
何も言えない。
言おうとしてるのに声が出ない。

最低最悪だな、俺。

「　　」
「は？何言ってんだ？聞こえねぇよ」
「バイバイ」

俺の質問を無視して、そう言って柚兎左は去る。

俯いて歩く彼女を、俺は止めることもできずに立ち尽くしたままだった。

すれ違い様、微かに聞こえた言葉。

『死にたい』

びっくりして振り返ったが、お決まりのように柚兎左の姿がなかった。

急いでいつも柚兎左が乗る電車の方のホームに降りるが、扉が閉まった直後で、結果追いかけることができなくなった。

「何なんだよ……」

前髪を握り、しゃがみ込む。

結局、柚兎左は何が言いたかったかは俺には分からない。

死にたいとはどういう意味なんだ？

意味は分かるが、そんなことを言う理由が分からなかった。

自分が柚兎左を傷つけたというのはこんな俺でも理解できる。

「お前のこと、嫌いなんかじゃねぇよ……」

今言っても意味のない言葉。

今更言ってももう遅い。

あいつには届かない。

自分が乗るはずの電車が発車した。

その時の風の音はまるで、誰かの叫び声のようだった。

俺があのとき言葉を発していたら、何か変わっていたのだろうか。

??・壊れた瞬間（後書き）

次回は……また遅くなると思います（ー＿ー；）

ですが！必ず更新しますんで見捨てないで下さいね…（T ー T）

??・推考（前書き）

最後の更新から、ぴったり二十日！！

ホントごめんなさい！

ネタが思いつきませんでした（汗）

二十日もかけて書いた割には、この話の一番の駄作となっております。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！

??・推考

『私は私のままでいれたのに』

昨日の柚兎左の言葉。

私は私のままとはどういう意味だろう。

いや、何となくわかるのだが、そんな簡単に変わってしまうものなのか。

確かに性格がかなり変わったとは言え、あれ以上の変貌など想像もつかない。

最初は包帯ぐるぐる、そしてコロコロ変わる雰囲気、苗字呼び、冷淡な態度。

その前のカラオケの時は、俺だけ避けられていたな。

とすると、引っかかるのは包帯が巻かれた理由、つまり試合の次の日だ。

本人は、ガラスの散らばったところで転んだと言っていた。

正直信じられなかった。

それが真実だとしても、ガラスが散らばったところとは、どこのことだろう。

ガラスの類のものは、窓や花瓶、皿、鏡……他にもいろいろあるが今は思いつかない。

窓だとしたら、窓の外から割られ室内で転ぶか、その逆。
普通に考えてそれはないか……。

「そうだ」

通学鞄にある、ルーズリーフをまとめた小さなファイルを取り出す。
授業のノートを忘れたときに使用するが、メモ用紙や落書き紙としても使用している。
落書きするのは、大抵陸だが。

普通のノートが無いから、これを使うしかない。
さすがに授業のノートはいかんだろう。
広告は母さんが使うなって言ってるから使えないし。

「とりあえず、探偵気取りをして推理してくか」

そう呟き、シャーペンを筆箱から取り出す。

ルーズリーフには、最初に『ガラスのもの』と書き、次に『窓』と書いて、先ほど考えたことを書く。

「よって、ありえねぇっと……。次は花瓶か」

花瓶は結構ありそうなパターンだ。

割って、水で滑って転ぶとかありそうだな。

「保留だ……。次は…皿……ってこれはあるから保留で、鏡」

鏡ってそう簡単に割れないよな？
何かに叩きつけられるか、叩きつける、あるいは倒れたり落としたり…つまり、何か衝撃を与えないと割れない。

「あの傷なら、破片が足りないか…？」

全身包帯…悪く言うとミイラみたいな感じだった。

鏡じゃ少し足りないだろうな。

って、こんなことしても分かんねーよ！！

『♪♪♪♪♪』

げっ！電話！？
母さんにばれたら叱られるが、出ないわけにも行かない。

通話ボタンを押して、電話に出る。

「もしもし…」
『晋一ー！何湿気た声してんだよ』
「真広か…いや、別に。何でもねぇ」
『ふーん。柚兎左関連かよ』
「な、なな何で分かった！」
『いや、何となく。半分賭だったな』
「……俺のバカ。カス」
『はぁ？……まあ話して見ろって！友達だろ？』
「分かったよ。笑うなよ」

『……おぅっ』
「何だよ、今の間」
そうツッコみながらも、何故か話してしまった。

『へー、あー、あぁ』
「何だよ」
『いや、それアレだ……。お前何で言わなかったんだよ』
「俺も今、後悔中だっての。とりあえず、あんなこと言うから元に戻そうとな。原因から直してけば、元に戻るんじゃねーかなって」
『へー。お前も青春やってんだな』
「何が青春だよ……あいつを元に戻したい。それだけだ」
『……』

なんだよ…何か言えよ……。
携帯熱いし。
通話時間軽く十分越えてるし。
早く切らねぇと通話料金が！

『明日空いてるか？』
「ああ」
『柚兎左ん家行くぞ』

何を言うかと思えば、変なことを言うもんだ。

「んなことしなくても、学校で会えるだろ」
『元に戻すんじゃねぇのかよ？あいつがあんなんだと、こっちにも火の粉が降りかかってきそうで怖ェんだよ』
「真広にも怖いものあるのか？」

『女は無理だ』

即答かよ。

まあ、だいたい分かるが。

「女って……どうせ海月だろ？」

『あれは最悪だな。今の柚兎左も無理だっての』

「分かったよ。てか、柚兎左の家知ってるのか？」

陸なら知ってると胸を張って言うだろうが、真広はどっちかというと、男同士で連むというか不良だ。

自分から女に興味を示す奴ではない。……と思う。

てか知ってなきゃ、そんなこと言えないしな。

『知らね』

……こいつ何て言った？

「はぁ！？じゃあどうやって行くんだよ！？」

あー、十五分とっくに過ぎてる。

料金が…。

『尾行』

「……」

辞書を引いてみよう。

電子辞書を取り出し、高速で『尾行』と打つ。

「尾行。そっとあとをつけて行くこと」
『ああ。てか何で辞書引くんだよ』
「それって要するに……」

思いっきり息を吸い、スピーカーを口の前に近づけて叫ぶ。

「晋一。晩ご飯でき」
「ストーカーじゃねえかぁぁぁぁぁ！！！！」
「なぁぁぁぁぁに電話してんのよ！！」
「母さん！？」
『うるせーよ！！晋一！携帯のスピーカー悪くなる上、俺の鼓膜がびりびりに破れるっつーの！！』

真広の声なんか無視して、殺気を立てている母さんを見る。

素直に怖い。

母さんは俺に近づき携帯を奪い取る。

そして通話を切断して、その瞬間火山が大噴火する。

「二十分以上話すなんて……。何やっとんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
「申し訳ございません！！母上ぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！」

母さんの怒声と俺の懺悔の声は隣の家にもはっきりと聞こえていたと知るのは、少しあとのこと。

通話を切断された直後の真広

「晋一…やっぱ俺、女苦手だわ……。てか、明日謝んねーと…」

??・推考（後書き）

春休みの宿題が冬休みの宿題より多い……！！
何故じゃ！！
ＤＩＶＡ２が壊れた……！！
何故じゃ！！
モンハン３で熟成キノコってどうやって採集するの？

え？小説書けよって？
うぅ……はい、そうですね（＾＾；）

??・孤立（前書き）

春休みがこんなに苦痛とは……

一昨日カラオケ行ったけど、つまらなかったから暇つぶしに書いた話です。

書いてて思った。

自分で考えたキャラクターなのに性格が分からなくなってきたなぁ……

??・孤立

「晋一…昨日は本当悪かった」
「電話のことか？気にすんな……」
「気にすんなっつっても、柚兎左二号になってんぞ…」

昨日の母さ……母上からの鉄槌。
中学生の息子に劣らぬ力はどっから出てくるのだろう。
壁に穴開いたのと、階段から滑り落ちた怪我で済んだのは、恐らく不幸中の幸いと言うものだろう。

ちなみに今の俺は、顔にガーゼ、手首や見えないけど脛や足首に湿布、指に絆創膏、膝から下と腕に痣、その他細かい傷が数カ所といったところだ。

正直物凄く痛い。
階段とか一分も掛からないはずが、五分。
亀と競争したら、亀の方が速いかもな。
いや、言い過ぎか。

「……お前のところの母上、すげーな」
「だろ。父さんに聞いたら、空手の県大会で準優勝したらしい」
「…よく生きてたな。賞状でも送ってやろうか？」
「ああ……。自分でもすごいと思う」
「ちなみに親父は何かやってたのか？」
「書道とそろばん。あとピアノを少し」
「地味だな。てか、遺伝してんな」
「そうか？」

「字とか計算力とか。音楽は、歌は下手だけど楽器は上手いよな」
「歌は余計……」
とんとん拍子で話していたから気付かなかった。
教室が静か。
みんな硬直していた。
暴れていた奴は、殴ろうとしてるところでぴたっと止まっていた。
笑っていた奴は、大口開けたまま硬直。
何だ、このビデオを一時停止した感じの光景は。
どんだけだよ。
そしてさらに、みんなの視線はある一点に焦点を合わせていた。
真広と目を合わせてから、みんなの視線を辿る。
そこは教室の入り口。
そこにいたのは…
「海月……」
「てめぇ…ボロボロじゃねぇか！！」
土やアスファルトの黒で、制服は汚れていた。
そんな海月に真広が直ぐ様駆け寄り、汚れた制服の土を払っていく。

海月は俯いたまま、ずっと何かを呟いていた。

「……さい…」

それに気付いた真広は、舌打ちをして肩を掴んで揺さぶりながら言う。

「はぁ！？もっとでけぇ声で言えよ！」

「ごめんなさい」

「何が？」

「ごめんなさい……ごめ…ん、なさい」

「おい！」

弱々しく立っていたが、真広に寄り掛かるように倒れた。

さすがに、じっとなんかしては、いられないだろう。

固まっていた奴らは、海月の元へ駆けだした。

「海月っ！！」

「桜井！」

「ちょっ…大丈夫！？」

「みっちゃん？しっかりしてよ！！」

どうやら海月は気を失っているらしい。

俺は、足が痛くて少し遅れたせいで、海月の姿を確認できるところはクラスメートたちで埋まっていて、よく分からない。

――ガラッ

みんなが集まっているところとは逆の扉が開く。
入ってきたのは、柚兎左。
みんなの方は見向きもせず、真顔のまま自分の席へ一直線。
無言で席に座り、普通に鞄の中の荷物を机にしまい、席を立つ。
その間、誰も話さず音を立てずに柚兎左を見ていた。
ほとんどの奴が軽蔑な視線で。
ロッカーに鞄をしまい終わると、また席に座り頬杖をついてぼんやりと外を眺める。
「おい、柚兎左。海月がこんなんなのに心配しないのかよ？おめーら親友だろ？」
「そうだよ！！」
渡辺と中澤が柚兎左に向かって強く言う。
柚兎左は表情を変えずに、席を立ち、二人の方を向く。
「あんたらが屯（たむろ）するから見えないんだけど。見てほしいんなら退け、野次馬共」
冷たく言い放つ。
柚兎左の目は、瞳孔開き気味で下半分は白目で、プレッシャーを放っている。

中澤はキレて言い返す。

「野次馬って何よ！海月がボロボロだから心配してるんだよ？心配しちゃいけないわけ？」

「心配して何になるの？心配するんだったら、何かやりなさいよ。見てるだけで何もしない奴のことを野次馬って言んだよ！！」

「でもっ」

「じゃあ何？ただ海月のボロボロな醜い姿を見てるってわけ？楽しんでるわけ？逆の立場になれよ。恥ずかしい姿を見られたいのか？そう思う奴（変態）名乗り出ろ！」

柚兎左の言ってることは、俺としては正論だと思う。

きっとみんなもそう思ったのだろう。

黙ったまま下を向いている。

中澤も、涙を浮かべて黙っている。

一人の女子が言った。

「あたしは、みんなが心配してくれると心が軽くなるよ！」

「へー。じゃあ、すんごい恥ずかしい姿でも心配してくれるなら恥ずかしくないんだ」

「そ、そうよ！」

「へー……」

柚兎左は、その女子に手招きして自分の方へ来させる。

「目を瞑って、みんなの方向いて。痛いことはしない」

「……」

女子は疑いながらも、教卓の方を向き目を閉じる。

すると、柚兎左は袖から何かを落として、それを受け止める。

――カチカチカチッ

――ビリッ

『きゃーっ！？』

「やだっ！見ないで！」

「恥ずかしくないんでしょ？ほら、みんな心配してくれてるよ？」

柚兎左が持っていたのはカッターで、背後からセーラー服を切り裂いた。

セーラー服だけならいいものの、スカートまで一緒に縦に一直線に裂いた。

「わぁぁぁぁっ…やめてよっ……やだぁぁぁ」

女子は泣き叫んだ。

柚兎左は勝ち誇ったような顔をして言う。

「ほら。恥ずかしいでしょ？海月も同じようなもんよ。分かったらそんなこと言うなよ」

「柚兎左！ここまですることないじゃない！」

「そうよ！汐里が可哀想よ！」

女子からの沢山のブーイング。
柚兎左は女子を見てから舌打ちして、ため息をこぼす。
「だから言ってんだろ？可哀想ならジャージ持ってくるとか男共の学ランはぎ取って着せてやれよ！！そんな対処も出来ねーのか？…ああ、小野君は分かってんだ」
言葉からして、海月に学ランを着せたのだろう。
女子たちは、男子から学ランを借りて羽織らせて、トイレへ移動した。
残ったのは数人の女子と男子。
「海月、保健室連れてく」
そう言って立ち上がり、海月をお姫様抱っこして廊下に出た。
「おはよー」
それとすれ違って、今頃登場した先公。
いつの間にか着席している柚兎左。
さっきと変わらぬ、興味ないというような態度で外を見ていた。
学級委員が、先生に近寄って状況を報告する。
先公のアホみたいな顔が、だんだん険しくなり、頷きながら目だけで柚兎左の方をみる。

一通り報告し終えたようで、先公は柚兎左の方へ向く。

「江川。ちょっと、職員室来な」

「……っ」

舌打ちしてから席を立ち、別に顔色を変えることなく歩き始める。

普通は先生のあとを着いて行って職員室に行く。

だが、柚兎左は学級委員にどうするか指示している先生を置いていき、職員室に向かった。

先生は焦って、早口で指示すると柚兎左の後を追った。

??・孤立（後書き）

あー…宿題が終わらない。
ゲーム我慢してるのになぁ……（、へ、；）

??. 単純な俺たち（前書き）

昨日から私の住んでいるところは暑いです。
半袖着てる人いたよ！
……春ですねぇ（、∀、）

??. 単純な俺たち

「おーい！みんなぁ！今から普通に短活始めるぞ！席着けー」

学級委員の言葉により、みんなはしぶしぶ席に着く。

全員って言うわけではないが。

「ヤマケン！短活って言っても、今日の日直いませーん」

軽く自己紹介。

学級委員山本健介。

ニックネームはヤマケンで、スポーツバカ。

「まぁ、そうなんですけど。じゃあ俺がやるよ」

「何か面白い話してくれよ！」

「そうだって！スピーチを兼ねてさ」

ヤマケンは話すのが上手らしい。

父親が落語家なのもあって、面白い話から怖い話までいろいろな話をしてくれる。

柚兎左のセーラー服引き裂き事件なんか忘れて、ヤマケンの話で盛り上がった。

「でさ、何を言うかと思ったら『お嬢さん、面白い顔だね』だと。かわいい美少女をほったらかしにして、平凡少女に声を掛けてるわけよ。もう可愛子チャンはこんなんよ！」

『あはははっ！』

「ヤマケン、サイコー！」

まじめに、事件のことなんて忘れているようだ。
ジャージ姿の汐里って子も笑っている始末。
「何なんだよ……このクラス…」
小さい声で呟く。
呟きは、みんなのでかい笑い声にかき消された。
「よ、晋一」
「陸……何でいるんだよ」
「何でって……。あのレディーが席替われって」
「……ああ。なるほど」
陸の席を見ると、自分の隣に居るはずの女子がいた。
仲良さそうにしてるから、親友なんだろう。
「俺も晋一と話せるし、麻耶も美理と話せるから一石二鳥だろ」
「だな。てか何だよ…こいつらの切り替えの早さは」
「同感。柚兎左はまだ戻ってこないし、真広も海月も戻って来ねぇ」
「寂しいか？海月がいなくて」
「ああ。そりゃあ……って何言わせんだよ！」
「世の中捨てたもんじゃないな」
こんな素直な奴がいるなら、この世もまだ終わってないと思える。
「どーゆう意味だよ…高橋君！」
「そのままの意味だ、赤松君」

「晋一だって柚兎左が心配じゃないのか？」
「何言ってんだよ！！」

何で知ってるんだ？コイツ。
真広の奴バラしたか？

今のところ真広にしか言ってないはず。

「好きじゃないのか？」
「な、何でそう思う」
「え、何でって……」

試しに聞いてみよう。
ていうか、真広が言ってたなんか言ったら、どうしようか。

今の雰囲気からして、怒れないよな……。

「何でだよ」

さっさと答えろよ。

全く……。
どきどきが止まんねぇよ。

「何となく」
「はぁ？意味分かんないんですけど」
「態度っつうか…、何て言うの？雰囲気だ！」

まじかよ。
そんな分かりやすかったか？

ていうか、俺自身気持ちに気付いたの昨日だし。
「特に練習試合！あのとき追いかけたじゃん！それで気付いた感じ」
「……」
マジかよ……。
何じゃそれ。俺が驚きなんだけど。
「なんつー引きつった顔してんだ？」
「いや……別に」
「さては……図星か！図星なんだな？」
「違ェよ！何勘違いしてやがる」
「照れちゃって…」
あーうぜぇ！
久しぶりだ。こんな殺意が芽生えたのは。
「あ！真広！」
ヤマケンの言葉に、全員振り向く。
一斉に振り向かれたから驚いて、真広は一歩下がる。
「海月はどうだ？」
覚えてたんだと少し驚く俺。
「……病院行った」
『え……』

??. 単純な俺たち（後書き）

何か悲惨になってきたー

次回は回想みたいな……感じ？

恋愛要素を取り入れました☆

？？・もう一つの恋（前書き）

今回は真広目線！！

私にしては、ちょっと長いです（＾＾；；

??・もう一つの恋

「ったく…保健の先公いねぇのかよ」

保健の先公なら、常に保健室いろよ。

ぶつぶつ言いながらも、居なかったことに感謝する。

あんな先公と話してたくねぇからな。

海月をベッドに寝かせて、羽織らせていた学ランを取り、代わりに毛布をかける。

海月は相変わらず気を失っていた。

何かすげえぐったりしていて、病人みたいだった。

「……海月」

そういえば、海月のこんな姿は初めて見た気がした。

いつも俺には偉そうに命令する奴が弱々しく寝息をたてている。

普段強い奴に限って、弱い一面を見ると余計に心配になる。

全く…調子狂うな……。

「ったく……ん?」

海月を見ると、手首の方に何か痣のようなものが見えた。

試しに袖をめくってみる。

「んだよ……これ」

腕は、痣や切り傷、擦り傷やらで酷かった。

毛布もめくると、足の方にも同じようなものができていた。

殴られたのか？コイツ

自分が喧嘩したときに作る傷と同じようなもんだった。

切り傷とかは消毒しといた方がいいよな。

悪化すると傷残るし。

先公もいねぇから、薬箱を勝手にいじらせてもらおう。

別に罪にはならねぇだろう。

適当に棚をいじると、すぐにそれらしいものが見つかった。

「これか？」

ラベルに書いてあるし、消毒液はこれで、ガーゼはこれか。

……今思ったが、一人でぶつぶつ話すのって人から見たらキモいよな。

もう独り言はやめるか。

薬をそろえて、海月の方に戻る。

「ちと荒っぽいけど、我慢しろよ」
今のは独り言じゃねぇ。
話しかけたんだ。
ガーゼを消毒液で湿らせて、傷口に当てる。
血が出てるところは少ねぇが、痣が多い。
腕と足の傷は消毒して、絆創膏を貼っておく。
試しにセーラー服をめくってみると、そこにも痣ができていた。
痣は自然に治すものだから、手の施しようがねぇ。
てか、いつになったら先公は来んだよ。
反対の腕にもガーゼを当てて消毒する。
「ん……」
「あ、起きた」
海月はうっすらと目を開けて、俺の方を見る。
焦点が全くあってねぇや。
目を覚まして安心したのもあるが、同時に傷だらけの理由がとても気になった。
「……ぃ」

「あ？何だよ」
「痛っ……」
「悪ィ」
普通に消毒してたつもりだったが、染みたらしい。
野郎と違って、女の肌は繊細なんだな。
丁寧に扱えってか？面倒くせぇ…。
「ど……こ？」
やっとはっきりしてきたらしい。
でも、やっぱりすげぇ疲れたような顔をしていた。
「保健室。おまえがぶっ倒れたから」
「そ、なんだ……。あんたが？」
「運んだのか？そうだ。ちったぁダイエットしやがれ」
別に重すぎってわけでもないが、軽くもない。
身長もあるし仕方がないだろう。
ちょっとした嫌味だ。
「あり…が、とう」
「っ！？」
何つった？今……

ありがとう？
貶したのに礼が先かよ…。

「明日は嵐だな」
「それじゃ、学校……行けないね」
「サボれるからいんじゃね？」
「ふふっ……。あんたらしい」

何なんだよ…こいつ……。

こんな可愛い素直な奴だったか？
いやいやいや！
凶暴で気が強くて最悪な奴だ！

可愛さの欠片もねぇ……はず。

「真っ赤」
「るせぇっ！」
「何が赤いのかな？」
「こいつ……！！直接消毒液ぶっかけるぞ」
「……手当してくれてんだ」
「見れば分かるだろーが」

てか、さっき痛いって言ってただろーが。
こいつ、アホか？

海月はうっすらと笑みを浮かべた。

「意外」
「喧嘩やったら怪我すっから、一応手当くらいできんだよ。悪かっ

たな意外で」

やべえ……。

すんげぇドキドキする…。

でも、今のその笑顔は病人みたいで、どこか悲しい気もした。

「てか、何でこんな怪我したんだ？」

「っ……！それ…は……」

海月は目を見開いて、震え出す。

段々、息も荒くなって怯えているような顔になる。

「はぁ……はぁ……やだっ…」

「おい、海月」

「いやっ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！！」

突然、頭を抱えてうずくまりだした。

手を伸ばせば弾かれるし、でかい音を立てれば、枕を投げてくる。

「海月！」

「ごめんなさい……ごめんなさい！柚兎左！柚兎左ぁ！」

柚兎左？

柚兎左って江川柚兎左だよな？

珍しい名前だし、あの柚兎左しかあり得ねぇか。

じゃあ柚兎左がやったのか？

「海月！何もねぇよ！落ち着け」

「柚兎左！戻ってきてよ……やだ！一人にしないで！」

“戻ってきてよ”？

と言うことは柚兎左じゃねーのか？

あー…くそっ！

訳わかんねぇ！

「海月」

「ごめんなさい…！！ごめんなさいごめんなさい……」

「ったく……」

何とかして落ち着かせようとしてみるが、怯える一方。

……

「ごめんなさ……」

気付けば俺は海月を抱きしめていた。

あー……俺も晋一のこと言えねぇな。

こいつ、氷並に冷たいし。

「やだ！離して……！誰か助けて！いや…だ……！はぁ……はぁ……」

びっくりしてからかさらに騒ぎ、抵抗していた海月も暫くすると大人しくなった。

「ったく…何なんだよ……おめーは」

「……真広？」

落ち着いたから、今の状況を把握したようだ。

「ねぇ……」

「んだよ…」

「何って……もう離して良いよ？落ち着いたから」

本当、こいつはアホだ。

俺が誰にでもこうすると思ってんのか？

「察しろ…アホ女」

「アホじゃないし……バカ真広」

「おまえより成績良いっつーの」

「ちゃんと言いなさいよ……」

こいつ…わざとか？

それとも鈍いのか？

心臓の音が直接耳から聞こえる。

どんだけドキドキしてんだよ。

こんなに緊張すんの、初めてだな。

……何で黙ってんだこいつ…。

言えって？

自棄になれって？腹を括れって？

あ――――――っ！

「好きだ…バカ」

「っ……！ぅ、五月蠅い！下僕のくせにっ」

「おめーが言えっつったんだろーが！下僕じゃねーし！」

あーっ！

心臓パンクするっつーの！

てか俺ぜってー顔赤い！

「ぉ、おめーは……どうなんだよ！」

「あ、あたしは！察しなさい！」

「はぁ！？」

何かビビっちまって、海月を離す。

うわっ、こいつリンゴ並に真っ赤だな。

目も涙目だし、若干震えてやがるし。

涙目っていうか泣いてる！？

俺何か悪いことしたか？

「俺が言ったんだから、言えよ！！」

「っ！」

何か滅茶苦茶震えてやがる！
自棄になりすぎた……。
「悪ィ……でけぇ声出して」
「ごめんなさい」
「また“ごめんなさい”か…。何があったかは聞かねーけど、病院行けよな。怪我とかひでーし、精神的にもあれだろ？」
「うん。……ごめんなさい。その……私、怖かったから……残っちゃって……。だから」
「いい。話せるときに話せ」
ポロポロ溢れてくる涙を親指の腹ですくい取る。
どんだけ怖かったんだよ。
「ありがとう」
海月は俺の手に手を重ねる。
また涙が一筋頬を伝う。
「で？どうなんだよ」
「え〝…」
俺も精神的にキツいっての。
告白なんかしたことねーから、この微妙な気まずい空気に耐えられねぇ。
「……ょ」

「は？」
「だから……その……。…す……き……私も…」
超がつくほど小せー声だったが、俺には聞こえた。
ちきしょー！むちゃくちゃ照れるじゃねーかよ！
てかこの後どうすんだよ！
と、動揺しながらも何とか言葉を発する。
「っ！ふんっ…最初から言え……海月」
「ぅ、るさい！……真広のばか！」
こいつ……後ろ向きやがった！
その間に、火照りを鎮める。
アイツの気持ちも確認できたから、緊張もすぐに解けた。
さて……
「海月」
「何よ…」
「こっち向けって」
「イヤ」
「……」
どうやったら振り向くかな。
髪、きれいだな……。

何となく解いてみると、サラサラとしていて、シャンプーの良い香りがした。

「ちょっ！髪解くな！バっ……」

髪解いただけで、簡単に俺の方を向いた。

思惑通り、振り向いた海月の唇に、俺のそれを重ねた。

海月はびっくりしたようだが、抵抗も何もせずに俺の肩に手を添えた。

……まだ震えてるし。

長さとかよく分かんねーけど、俺の気が済むまでやってやる。

実を言うと、一年の頃から海月に想いを寄せていた。

てっきり晋一が好きなのかと思っていたから、告らなかった。

気持ちがすげぇ高ぶる。

今、この時が幸せっていうんだろう。

ずっと、続くといいんだけどな……。

やっぱ現実はそう甘くないようだ。

「小野君、桜井さん」

『っ！？』

お互いがお互いを突き放して、声がした方を見ると、やっとのご登場の保健医、矢部秋穂だった。

あの役立たず、今頃登場かよ！

肝心なときにいない上に、何てタイミングの悪い！

「小野君、何やってるのかしら～？」

「…別に」

ドスの利いた声で言い返す。

恨みの念も込めて、矢部をにらむが、ビビる様子もなく変わらずに会話を続ける。

「うふふ……。そういうこと学校でやっちゃダメよぉ～」

「うっせーよ！！何しに来たんだよ」

「怪我の手当とその他諸々～。小野君、途中で止めちゃうんだものぉ」

そういえば、消毒の途中だったな。

って！何で知ってんだよ！

「い、いつから見てた！？」
「桜井さんをベッドに寝かせて『……海月』って囁くところから…」
「最初からじゃねぇかよ！」
「先生も空気読んだのよぉ～。さすがにキスは教師として見逃せないから嫌々ながら」
「嫌なら出てくんな！」
「桜井さん、大丈夫？」
「無視すんじゃねぇ！」

いきなり無視とは何だよ！この先公。
やっぱ苦手だ。くたばれ。

後ろにいた海月の方を見ると、また震えてやがる。

「この匂い……。やだ……」

匂い？
すげー小さい声で言ったけど、聞き間違いじゃないはず。

匂いっつっても、香水と薬品の匂いしかしねーと思うけど。

「どうしたの？怪我酷いし」
「いやっ！！来ないで！ごめんなさい……」
「桜井さん？」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

今度は何だ？
先公にかなり怯えてるように見えるが……。

「海月……」
「桜井さん……失礼するわね」
矢部を見ると、いつの間にか海月の後方に回っていた。
何かの薬品とハンカチを持っていて、ハンカチの方を海月の鼻と口を覆うように当てる。
「んぐっ！？……」
数秒すると、海月は気を失った。
「今のって……」
「クロロフォルムよぉ～。桜井さんは後で病院連れてくわぁ。小野君は教室に戻りなさい」
「怖ェ先公だな。チッ…わーったよ……」
「心配しなくても救急車呼ぶから大丈夫よ。彼氏クン」
「るせー……」
海月をもう一度見てから、保健室を出る。
…やっぱ、女は怖ェし苦手だ。
てか、あの女のような奴だけが苦手だ。
そういえば……さっきの矢部に見られたよな？
「……はぁ……」
何か疲れた。精神的に

俺は重い足取りで教室へと向かった。

？？・もう一つの恋（後書き）

うん、自分で書いたのに何故かドキドキしました…（＊´д`＊）
読めば分かると思いますが、これは前話の同時刻の保健室にて。
回想みたいなものです♪

とにかく、誰かをくっつけたかった……！！

?.?.?. 二つの争い（前書き）

二年生になって約一週間。
やっとクラスに馴染めてきた桜音です。
更新遅い割に、分量が少ないです。

あと、『〇』は、B組の皆さんの心の声です。
心が通じ合ってるんですよ（，∀、）

???・二つの争い

「まあ、そんな訳で病院行った」

『……』

何か、真広の奴…途中で赤くなってたよな。

『色々あって』って言ってたところ、かなり赤面してたよな……。

みんな何かあったなって感づいてるだろう。

あえて聞かないのが、ある意味良いクラスだな……

「真広、顔赤いぜ？色々あってって省いたとことか真っ赤だったけど」

『（このバカが……！空気読めよ！）』

「は？な、何言ってんだよ！！別に赤くねぇし！暑いんだよ今日は！」

まあ、確かに今日は最高気温が平均より高いが、今は別にそこまで暑くない。

肌寒いと言った方が妥当か。

「海月と何かあっただろ？教えろよー」

『（それは俺　（私）　らも気になる！！けど陸、空気読めよ本当！）』

「別に何もねぇよ」

俺は、陸が海月に対する気持ちを知っているからある意味仕方ないと思うけど、それはみんなも同じで知りたいが我慢している。

それを察するんだ！

「教えろって言ってんだろ！？」

「何もねぇって！」

「いや、何かあったな。みんなは騙せても俺は騙されねーぜ！！」

『（誰も騙されてないから！みんな分かってるから！）』

今、陸と真広以外のここにいるみんなの心が一つになっているようだ。

心の声が聞こえるような気がする。

「陸、まあまあ落ち着けって……」

「落ち着いてられるか！気になるじゃんよ！」

『（それはみんな同じです）』

「とりあえず、な？」

真広がキレる前に止めよう！

喧嘩っ早いから喧嘩強いんだ！

結構有名なんだぞ！？

『鬼神の真広』って言う異名があるんだぞ？

猿が神に勝てるかよ！

「うるせー！！教えろー」

「るっせーな！何もねぇよ！」
「何もねぇわけねぇ！お前から海月の匂いがするんだよ」
『（お前は変態か！？）』
「学ラン着せてたからじゃねぇのか？」
「いーや！シャツからもするね！！」
「保健室連れてったときに抱いたからじゃねぇの？」
「起きてるときの匂いだ！寝てるときのじゃねぇ！」
『（うん、お前は変態だ。超が付くほどのな）』
「あ〝ー！うっせーよ！何もねぇつってんだろ！」

真広がキレる寸前に、パタパタと足音がした。

そして、扉から姿を現したのは保険医の矢部秋穂先生だった。

「小野君！桜井さん病院行ったわよん！もう保健室であんなことやこんなこと、しちゃダメよ」
「矢部！何言ってんだ！」
『す、進んでるぅぅぅぅぅ！！』
「ちげぇよ！何想像してんだ！」
「そぅよぉ～。抱きしめるのとキスしかしてないわよぉ」
『マジでぇぇぇぇぇ！？』
爆弾発言にみんなが驚愕する。

勿論俺も、陸も、みんなきれいにハモった。

「矢部！何言ってやがる！！」
「え～。だって本当のことじゃなぁい」
「まぁぁぁぁひぃぃぃぃろぉぉぉぉぉ……」

隣にいる陸がキレた。

「陸、落ち着けって！マジで！」
「お前に……決闘を申し込む！」
「そろそろ受験勉強始めるからパス」
「逃げるか！」
「んだとぉ？かかって来いよ！！」

戦いの幕が切って落とされた。

「先生！止めなくていいんですか？」
「ん～……桜井さんを巡っての争いでしょお？面白そうだから許可するわん」
「あんたそれでも教師！？」

と言うわけで、陸が先手を仕掛けようと真広に殴りかかる。

「うらぁ！」

かわされる。

次に真広が足掛けをする。

「うわっ！」

引っかかり転ぶ。

次に陸の攻撃。

すぐに立ち上がり、回し蹴りを仕掛ける。

「ふん」

かわされる。

真広の攻撃。

鳩尾(みぞおち)に蹴り。

「ぐはっ……！」

クリティカルヒット。

陸は倒れた。

真広は二の経験値を得た。

『（へぼっ！！）』

「へボいし弱いわね。つまんないわ～」

「先生、面白がらないで下さい」

当たり前の如く、真広の勝ち。

喧嘩なんかしたことない陸が、この町の頂点の奴を倒せるかっての。

不良の四天王だぜ？こいつ。

チャンピオンは高校生らしいが。

「俺は精神的に疲れてんだ。そこの先公のせいで！」

「え～私ぃ～？とんだ濡れ衣よぉ～」

「気持ち悪ィんだよ！！ババァのくせに！」

――ブチッ

あ、何か切れた音がした。
「ババァだと？私はまだ四十九よ！！」

マジか。
見た目三十代だが。
言われてみると、五十近くに見えなくはないな。

真広と矢野先生の口論はまだ続く。

「十分ババァだろ？厚化粧でケバいんだよ！」
「化粧くらいいいじゃない！ケバいって何だよ！」
「香水も臭ぇんだよ！マニキュアもデコりすぎだっての！気持ち悪ィ」
「おしゃれよ！」
「俺の姉ちゃんもそこまでじゃねぇよ！つか金髪（ぱつきん）とか、歩いてて恥ずかしくねぇのかよ？」
「そこらの男は私のことを“お姉さん”って呼ぶのよ？」
「汚根衣さんか？読み方変えて“きたねえさん”か？ケバすぎて汚いって言ってんじゃねぇの？それか汚い衣を被った根っこみたいに細い皺が沢山のババァか？」
「五月蠅いわね。桜井さんとキスしてたってバラすわよ？」
「弱み握ったつもりか？俺は肝は据わってんだ。公衆の面前でキスだろうが何だってできるぜ？」

そんなの海月が可哀想だ。

ていうか何時まで続くんだ？
この口論……。

?.?.?. 二つの争い（後書き）

最近ミルキィホームズにハマってきた桜音でした。
次の更新はいつになるのやら（｜｜；）
誕生日までには更新したいな♪

?.?.?.・微妙な結束（前書き）

母上の携帯で投稿！！
ちょっと浮かれてたら、投稿のことを忘れ…（ 。o 。（C＝（ |
；
申し訳ございません。
今回はマジで駄作です。
私のバカヤロー！！

???・微妙な結束

「はぁ……はぁ……」
「……」
「終わったか？」

口論が続くこと二十分。
無駄に長かったな。

二人とも息を切らし、ずっと言い合いをして疲れたのか、真広は汗をかいていた。

「この……ガキ…。なかなかやるじゃない」
「へっ、だろ？あんたもすげーな……。俺をここまで疲れさせるとは……！」
「ただの口喧嘩だろ。なに戦闘後のライバルみたいになってるんだよ」
「何言ってんだ、晋一。俺とババァは立派なライバルだ。俺と互角たぁライバルとしか言いようがねぇ」
「そうよ、高橋君。私たちは先生と生徒、大人と子供、女性と男の子、そして…ライバルよん」

最後だけ初期の口調に戻ったのがすごく気になるが、そこは胸にしまっておこう。

「あ、救急車」
「やっと来たのねぇん。じゃあ、先生行ってくるわねん」
「連れてったんじゃなかったのかよ……」
「ごめんなさぁい。ま、いいじゃない」

「よくねぇよ」

真広の言葉を聞かず、矢部先生は教室を出た。
真広は舌打ちして、「あのやろぅ」とかなり怒っていた。
あー怖ェな。

「そういや、柚兎左はどうした？」
「まだ帰ってきてない」
「そうか……。遅ぇな」
「ああ」

「別にいいじゃない」

誰かと思えば、汐里って子だった。

真広が「あぁ？」と問いただす。
あいつは少しビクッとしたが、怯まずに言う。

「柚兎左なんかいなくてもいい。いない方が良いよ！」
「そ、そうよね…」
「汐里にこんなことしたんだし……」
「とばっちりは受けたくねーもんな」

汐里の言葉にみんなも同意する。
だが、俺は何とも言えない感じだ。

それは多分、俺が柚兎左を好きだという気持ちがあるからかもしれない。

だが、あそこまでするのは如何なものかと思うのもあって、何とも

言えない気持ちがこみ上げる。
「俺はそーでもねぇぜ？」
口を開いたのは真広だった。
全員が真広に注目する。
汐里は目を見開いて驚いていた。
目大きいな…。
「お前らだって分かってんだろ？柚兎左はあそこまでしねぇって」
「気が狂ったんでしょ…？」
「そーかもな。けどな……全員が全員柚兎左が悪者だと思ってはいねぇだろ？単に汐里に同情してるだけだろ…」
「な、何それ……みんな同情してるから私に賛成してるわけ？」
「そんなことっ……」
「別…に……」
汐里の周りにいたクラスメートたちは動揺し始める。
どうやら、真広の言葉はみんなの図星を突いたようだ。
汐里はすぐにそれを悟り、表情が変わっていく。
「みんな私の“意見”に賛成してたんじゃなかったんだ……。実際のところみんなどう思ってるの？」
「別に、ただ…さ」
「変わっちゃったのかなってさ……」
「今までは別に何もなかったじゃん？ケガと今日と何か関係があるのかって」
「つまり、汐里にはアレなんだけど、さ……」

「あれは柚兎左じゃねぇ。俺たちの知ってる柚兎左はあんなことしねぇ」

「何か理由があるはずなんだ」

クラスメートが口ごもるのを、真広がみんなの言いたいことを言い、俺も補足として口を開いた。

「そう…よね」

「あいつ、悪いと思ったら後から謝る奴だし…」

「ねぇ……」

何だかんだ言っても、柚兎左は人を傷つけるような奴じゃないことはみんな分かってるようだ。

汐里を見ると、俯いて胸のあたりを握りしめていた。

「汐里……？」

「そ…だよね。柚兎左はそんなこと…しない、よね」

「汐里」

「ごめんね、私が悪かった。みんなの気持ちを偽らなきゃいけないような状況にして」

『……』

みんなはさらに複雑な表情をして俯いた。

そりゃ、どこをどうやっても汐里に罪はない。

なのに、謝られるというのは、俺たちにとって居心地が悪かった。

「や、やだなぁ～…みんな黙っちゃってさ！」

「でも……」
「いや、その…」
「私が悪いんだって！何居心地悪そうな雰囲気だしてんの！？ほら、シャキッとね？」

この時の汐里の笑顔は、本物なのか、偽りのものなのか分からなかった。

だが、ここから俺たちは汐里のお陰で結束し始めた、ということは分かった。

そしてある人は知っていた。これから“奇跡”が起こることを。

否、自分がとんでもない“奇跡”を起こすことを……。

？？？．微妙な結束（後書き）

ハッピバースデーわたしー　ハッピバースデーわたしー　ハッピバースデーディアわたしー…ハッピバースデーわーたしー

って今日歌っていたら、友達に虚しいねって言われたΣ（ノд＞）

今年の誕生日は、今までで最高でした！

？？？．離れていく彼女（前書き）

お待たせしてすみません＞（＿　＿）＜

どんなに遅れても、このお話を途中で終わらせることはありませんが、もう少し早く作成できるように努力はしたいです。

???・離れていく彼女

それから、柚兎左は戻ってこなかった。

先公は、二時間後くらいに戻ってきた。

そりゃあ、自分の担当教科をやらないわけには行かないと思ったんだろう。

ひどく苛立った雰囲気を醸しだし、一人が「柚兎左は？」と聞くと、

「あんなやつ知らん！！授業を始める」と怒鳴りに近い声を上げた。

それにビビってか、誰もその話題に触れずに通常通りに授業が行われた。

『ありがとうございました！』

「ありがとうございました」

授業が終わり、すぐに陸と真広が俺の方に早足で来た。

何故来たかなんて、考えなくても分かる。

「職員室にでも行くか？」

「でも、先生ちょーご立腹だったよなぁ」

「てか、帰ったかもな」

「購買行くついでに職員室の前通るとか！？」

「アホか。んなルート通ったら先公に怒られんだろーが」

「副担任にでも聞くか？」
「晋一聞けよ」
「面倒くせーよ。頼んだ陸」
「俺ぇぇえ！？」

絶叫する陸に向かって、静かに二人で頷く。

てかイヤなら、真広やれよとか言えばいいものを、陸は「えええぇぇ！？」と言い続けるだけだった。

「うるせえ」

真広の一言で、ビデオが一時停止したかのように止まった。

やっぱり、朝の決闘のせいか、真広に対して大人しい。

というか、大げさに言えば忠実だ。

「まあ陸、頼んだぜ」
「げぇぇぇ……！」
「じゃ、行ってこい」
「命令すんじゃねえよ！」
「おまえがモタクサしてっからだ！」
「ふんっ！真田せんせー！」

陸は副担の元へ行って、残りは俺と真広だけになる。

こっから陸たちの声は聞こえないから、とりあえず見るだけにする。

陸が話し終えると、副担は顔をひきつらせて腕を組む。

そして、耳打ちをして気まずそうに話してる様子がうかがえた。
少しの時間が経つと、二人の表情は同じような感じになる。
真広と目を合わせて首を傾げる。
まるで鏡のように同じポーズをされて、分からないのだと分かる。
もう一度、視線を戻しガン見する。
口が「あー……」と、具合が悪いように苦い顔をして、俺たちの方を見て頷く。
そんな頷かれたって、意味が分からない。
その後も二人して……、いや四人で苦い顔をしながら、先公と陸の会話は続いた。

「りくー。購買買ってきたぜー。クリームパンと焼きそばパンでいいよな？」
「おうっ！さんきゅーな！」
「飲み物はコーヒーな」
「……冷たいやつかよ。温かいやつがよかったなーなんて」
「売り切れてた。まあ、それも最後の一個で真広の眼力で手に入れたやつだしな」
「そうかー。さんきゅーなっ！」
パンを渡して、それぞれ席に着く。

予め、ちょっとした協力で軽く席替えをして、前には陸で、隣は真広になった。

自分のために購入した焼きそばパンを、破裂させて開ける。

この破裂音は癖になるな……。

そう考えていると、真広はこちら側に体を寄せて、静かな声で言った。

「で？柚兎左はどうしたって？」

「あー……あれぇ…」

苦い顔をして、キョロキョロしてからこいつも静かに話し始める。

「何かふっつーに先公は説教して聞かせたんだけどな。それにもっともな事を言われて、説教できんくなったらしい……」

「もっともな事？」

「まあ、何故そんなことをした？と言ったら『分からないから一番手っ取り早い方法』とかダメだよ？とか言ったら『私は口で言ってもダメだったからしたまでです。ちゃんと許可はとりました』とか」

「あれって許可って言うのかぁ？」

「ま、そういうことにしとこう」

「んで、先生がもう知らんとか何とか言っちゃって～……。あの先生によると、校長室行ったとか…」

話を聞いて、俺も真広も苦笑い。

さすがにそこまでとは予想もしてなかった。

「たぶん、帰ったんじゃね？」
「かもな……」
「てか、校長室まで行くとかなぁ。俺でも相談室に全職員だぜ？」
「いや、そっちの方がヤバいと思う」

さり気なくツッコんで、パンを食べる。

さっきまでソースが利いてて美味いと思ったのに、何だか苦い味がした。

校長室まで行くなんて、どこまであいつは変わってしまうのだろう。

???. 離れていく彼女（後書き）

確かめていないので、誤字脱字や文法の使い方の誤りなどあるかもしれません。

もし合ったら、すみません。

???・真の友情（前書き）

ふぅ……テスト終わった♪
火曜日に（^∇^;）

時事問題にウィリアム王子の問題が出てくるとは……。油断してた（<_>。）
初の遺産など知るかー！

すみません、ではどうぞ（・∀・）っ

???・真の友情

「しんいちー！俺と付き合え」
「……は？」

学校の帰り。

相変わらず、先公の怒りは収まらないまま、授業は行われた。

元々真面目に受ける俺ではないが、八つ当たりされてたまったもんじゃない。

授業でこんなにムカついたのは初めてだ。

しかも、昼過ぎからの授業は、学活。

苦痛だったな。

そんな、苦痛を乗り越えて帰ろうとしたときに陸に声を掛けられ、現在に至る。

付き合え？は？
まさかの非行に走ったか？

「何言ってんだ？」
「だから、付き合えって」
「げほっげほっ！！」
「どうした？」

「……どこかに行くんじゃなくて、まさかの“俺と”？」
「もちろん」
「おまえっ！」
「海月の見舞いに行くんだ。付き合えってこと」
「……陸、おまえとりあえず国語を勉強しとけ」

何という紛らわしい言い方。
国語はなくてはならない科目だな。
驚きと吐き気を同時に味わうことになる。

さて、海月の見舞いか。
真広が言うには、別人のようだと言うことだが。

一人称と口調が女の子だ、とは意味が分からなかったが。

「海月のってことは、真広も行くんだろ？」
「おう。今、委員会の資料を他のクラスに届けてるらしいから、あと十分くらいで帰ってくるはずだぜ？」
「あの真広を手駒に扱えるやつがいるとは……な」
「いや～……海月の代理だよ」
「…なるほどな」

ある意味、海月がこの学校最強な奴かもな。
陸は机に座り、後ろに手を着く。
俺も荷物を床に置いて、机に軽く腰掛ける。

「で、行くか？」
「ああ。どこの病院か知ってんのか？」
「まぁ……真広は知ってんじゃね？」

「おまえは知らねーのかよ！」
「えへっ」
「二度も気持ち悪ィこと言うなよ」
あまりの気持ち悪さに、自然と苦い顔になる。
陸はニヤリと笑った。
……嫌な予感。
「晋一くぅん！もぅそんな顔しちゃイヤ～」
「……」
「ねぇ聞いてるのん？」
「……うん、反応がない。ただの屍のようだ」
「なんですとー！？」
いや、もう本当に吐き気が。
陸のこのノリは嫌いじゃないが、さすがにこれはリアルで気持ち悪い。
「何してんだ？おめぇ」
「真広……ヘルプ」
「真広ぉ♪待ってたよん」
「……先公みたいなノリすんな、キモイ」
「ちぇっ！分かったよ。で？終わったか？」
「ああ。一年の代表と二年の代表に頼んだ」
「人任せかよ……。まぁ、真広らしいっちゃそうだけどよー」
「なあ。どこの病院なんだ？」
「駅前の市大病院だとよ。海月はまだ調子悪ィみたいだけど、話はできるらしい」

「んじゃ、行くか」
「荷物持ってくるわ。先に改札まで行ってろ」
「りょーかい」
机から降りて、床に置いた鞄を持つ。
後ろの扉から出て、階段を少し下りたところで陸が隣に並ぶ。
「今思ったんだけど、朝決闘もどきをして、二人ともキレてたのに、昼も今もいつも通りだよな」
「あ？ああ。まあ……あんなので友情ぶち壊すとかあり得ねーよ。そん時はガチでムカついたけどさ。しゃーねぇかって思ってよ」
「そりゃそうだな。おまえも寛大な心持ってんだな」
「男の友情は固いからな！」
爽やかな笑顔で言った。
それを見て、俺も同じように笑顔になった。
確かに、簡単に壊れる友情なんて友情じゃない。
どんな事があっても、最後は許し合えて笑い合える。
二人を例に取れば、両方とも同じ女子を好きになって、片方が両想いになって、もう片方が言いたいことをズバズバ言う。
それが喧嘩に発展したとしても、どんなに相手を憎いと思っても、最終的には何もなかったように元に戻る。
二人は違ったが、場合によってはもしかしたら今まで以上に仲良く

なるかもな。

互いに言い合い、互いに殴り合い、互いに嫌って、互いに許し合う。

そして、また好きになる。

それが真の友情と言うもんだな。

二人を見てそう思った。

？？？．真の友情（後書き）

友情論はあくまで持論です。
ただの私の理想だからね！

投稿遅くてすみません＞（＿＿）＜

明日のカラオケで次話書きまくります。

?.?.?.・病院（前書き）

一応ストックがあるから週一の割合で投稿できるかも！

感想下さいなんて図々しいことは言わないけど、これからも読んでいただけると嬉しいです（，∀、）

???・病院

それから真広が途中で追いついてきて、三人でダッシュで電車に乗った。

病院は、ここことは見違えるほど田舎って感じのところにある。

謂わば、落ち着いたところで、駅のほぼ終点に位置する。

その駅に着いて地上に上がると、大通りだというのに走行車は少なく、静かだった。

「田舎くせぇな」

「てか、大通りでこんなに少ないの初めてみた」

「静かで良いっちゃあ良いんだけど……」

それぞれ感想っぽいものを述べて、初めて通路側を向く。

『でかっ！！』

見えたのはヤバいほど大きい病院。

普通の病院の二倍はあるんじゃね？ってほど。

駐車場には、ずらーっと車が並び、駐輪場には自転車がずらーっと並んでいた。

これを見ると、それほど田舎じゃないな。

今の時間帯が空いてるだけか？

「真広……ここでいいんだよな？」

「先公はそう言ってたぜ？……間違えてねぇよな？」

「多分な～……」

あまりの大きさに俺たちは呆然とした。

この日差しの強さがなければ、ずっと放心してたかもしれない。

暑い。

「とりあえず、行こうぜ？」

『うぃ～っす』

真広の一言で病院の方へ踏み出す。

中に入っていくと、結構人もいた。

お年寄りから若い女まで、みんな見舞いか？

制服の奴らもいた。

高校生か中学生、よく分からないがチョロチョロと。

「桜井海月の病室はどこだ？」

「桜井様ですね。少々お待ち下さい」

真広が受付で海月の病室を聞きに行った。

若干キレたような口調だったのは、スルーの方向でいこう。

「なー晋一ー。俺、病院来るの初なんだけど」
「俺もだ。何か……アレだな」
「清潔感がプンプンだぜ」
「そりゃ病院だからな。そうじゃなくて…こう……」
背景が白い分、虚しさが倍増されてく、そんな感じ。
そう言おうとしたら、真広がポンッと肩を叩いた。
「七〇七だ。行くぞ」
言い終わる前に歩き始める真広の後を追った。

?.?.?. 病院（後書き）

あ、でも感想の代わりに、ワタクシをお気に入り登録にしていただけたら嬉しいな……。

はい、調子乗ってすみません！！

聞き（読み）流して下さい！

?.?.?.・白い空間で（前書き）

七夕！

…のはずが、私の地域では雨がザ――――っと降ってました←←

星、見たかったなぁ…

？？？・白い空間で

真っ白い空間を進む。

時々、花の絵や風景画が飾られていた。

でも、それ以外は真っ白。

扉も壁紙も床も天井も何もかも。

清潔感がとてもあるように思えるが、こんな空間に一人でいたら悲しくなるような気がする。

「七〇七……ここか」

止まった病室の表札を見ると『桜井　海月』と書いてあった。

どうやら個室のようだ。

寝てるとは言っていたが、さすがに黙ってはいるわけには行かない。

一応ノックして入る。

「海月」

「……なに？」

返事が返ってきて、驚く。

いち早く真広が海月の元へ行き、陸はゆっくりとそっと扉を閉め、

俺はゆっくりと歩いた。

「起きてたのか？」

「今起きた」

「悪ィな。起こしちまって」

「自然に目が覚めただけだから、大丈夫だよ」

うわー……ラブラブオーラが見えるぜ。

真広も意外と、友達と恋人は大切にするタイプなんだよな。

いや、恋人は今知ったけど。

チラリと陸を見ると、普通……どこか羨ましそうな感じがした。

それでも、あの空気をぶち壊さないという寛大さに素直にすごいと思った。

「晋一も陸も、どうしたの？」

「えっ、ああ。一応見舞い。元気か？」

「うーん……。まあ、一応元気…かな」

曖昧な返事をする。

腕に施されている包帯が痛々しい。

教室の時は長袖だったから分からなかったが、痣やかすり傷が白い肌のせいで、とても目立った。

「晋一だってケガしてんじゃん」

「これは母さんのせいだ」
「痛くないの？」
「今は全く。触れば痛いけどな」
「お大事に」

クスクスと笑う海月。

どうやら、本当に元気になってきているようだ。

海月が笑うのをやめて、軽くため息をつくと、病室は沈黙に包まれた。

……。

「海月」
「ん？なに？」
「聞いちゃいけないと思うが、何があったんだ？」
「……」
「晋一！」
「いいよ、真広。大丈夫。具体的に何が聞きたい？」
「その傷……」
「ああ、これ？……殴られたときに、かな？」
「誰にだよ！？」
「知らない人」
「海月、確か保健室で柚兎左がどーのこーのつってなかったか？」
「柚兎左……。まぁ…関係はあるんだけど…」

海月は口ごもる。

事の真相は海月しか知らないのだから、海月に聞くしかない。

俺たちは、黙って海月を見る。

言葉を選んでいたようだが、一つの言葉を思いついたらしく、小さい声でつぶやいた。

「柚兎左は、私にとっては原因。私にとっては加害者。でも柚兎左は被害者。あの人たちは紛れもない加害者。更なる原因は両親。……かな？」

「両親ってどっちの？」

「柚兎左の」

『……』

柚兎左は加害者であり、被害者である。

海月は被害者。

あの人たちとは、海月を殴った奴らだろう。

そいつらは、加害者。

言っては何だが、柚兎左の両親は首謀者。

……さっぱり分からない。

真広は両手をポケットに入れて、壁にもたれていた。

表情は目を閉じて、眉間にしわを寄せていた。

陸は、はてなマークを浮かべていた。

腕を組んで考える素振りをしては、アホみたいな顔をして分からないと目が言っていた。

つまり、理解してない俺たち。

「あれっ？分かんない系かぁ」
「悪ィ」
「俺もわっかんねー」
「大まかなことは大体分かった」
「……仕方ないなー。……いいよ、話すよ」

俺、陸、真広の順で言うと、海月は頷きながら苦い笑みを作った。

そして窓の外……いや、もっと遠くを見つめて言った。

「今朝の出来事を」

？？？？・白い空間で（後書き）

財布の通気性が良くなってきた……（｜＿｜；）

やべぇな？？

?.?.?.・裏切りの朝（前書き）

相変わらずの投稿の遅さ（｜＿｜；）
海月視点でお送りする27話でございます。

???・裏切りの朝

昨日の柚兎左。

陸たちを苗字呼びしたり、雰囲気が違ったり、傷だらけだったり。

どうしたんだろ…。

聞かない方がいいって、自分では分かってるんだけど、やっぱ気になるなー。

美桜とかに聞いてもらうのも気が引けるし…。

ここは親友である、うちが行くべしだよね。

話せば楽になるよ！

そういうノリで聞いてみよう。

実際そうだしね。

柚兎左はいつも遅くに来るから、普通に行って駅で待ってた方が得策かな。

相談する相手もいないし、そうしようか。

にしても、眠い。

誰かいないものか。

まあ、いたらビックリなんだけど。

そんなことを思いながら、ホームに降りる。
素晴らしいくらいに無人で。
なんだろーね。この虚無感。
ホントにさ…。
せっかく三年生になったんだし、受験勉強とか勉強とか塾とか。
青春なんてありゃしないよ。全く。
まぁ、人生一度しか過ごせない中学三年生だし、がんばりますか。
去年の終了式で、先生が言ってた。
『過去と今を比べるのではなく、その環境でどう楽しく過ごすかが大切なんだ』
結構感動したから、この言葉を胸に頑張ります。某先生。
今日も慣れない環境で、楽しく過ごすための道を探しますよ。
…そのためには、柚兎左は欠けちゃダメなんだよ。
てか、今思ったけど素直に教えてもらえないよねー。
触れてほしくない事情もあるし。
柚兎左の家は特に複雑っていうのは、うちも知ってる。

「やっぱ聞かない方がいいのかなぁ……」

呟きは、ホームに反響して消えた。

よく響くなーなんて思ったり。

はー…

電車来るまで、まだあるなぁ…。

仕方ないから本でも読もうかな。

勉強は学校と塾で十分。

勉強を思うと、最近同じように思うことがある。

入試、卒業…。

「……義務教育が終わって…、みんなとお別れ……なのかな？」

それぞれ、将来があるからみんな同じ学校なんて無理だし……。

やだな…。

『三番ホーム…電車。まもなく参ります……。白線の内側で…』

……無性にＫＹって言いたい…！！

電車に罪はないから、仕方ないか。

とりあえず、うちは点字ブロックの上に乗って、電車を待った。

「暑い！！やっと出られた……」

今日この時間に限って、満員電車っていうパターン。

何、この運の悪さ。

これで柚兎左に会えないなんて、最悪。

何が何でも遭遇してやる！

と、私が変に燃えてると、周りの人たちから変な目で見られる。

うちは変人じゃないんだからさ。

そんな目で見ないでよ。

まあ、階段を上ると人集りが改札の前でできていて、最悪なパターン。

何人いるんだろ？

ハッキし言って学生しかいないけど。

学生だけでこんなにって、世界中の人が集まるとどれだけなんだろ。

どうせだし、改札口で待ってよっと。

何か柚兎左を待って遅刻しそうだけど。

「七時四十二分…。先は長いなぁ」

短活が始まるのは十五分から。

本格的な遅刻は三十分から。

「てか、根本的に柚兎左来る系！？こなかったら困るんだけど！」

「はぁ……もうそろそろ行かないと遅刻……する…」

今日に限っていつもの電車に乗ってこない。

まさか、今日休み！？

うちの苦労はなんだったんだ…。

別にここじゃなくても、学校でも聞けるし……、行こうかな。

改札口を出、ゆっくりと学校を目指す。

もしかしたら後ろから柚兎左が来るんじゃないか、いつもと同じ…明るい声で「海月っ！」って言うんじゃないか、そんな期待を胸に秘めて。

「てめっ！ざけんな！」

？

後ろから女性の怒鳴り声がした。

気になって振り返ってみれば、女子高生。

柄の悪そうな人たちばかり。

今時流行るの？

竹刀とか。

で、ねらわれてる人を見れば吃驚仰天。

「柚兎左！？」

そう、朝からずっと待ってた柚兎左だった。

昨日よりもすごく冷たい表情になってて、ちょっと怖いけど。

逃げる人々に逆らって、柚兎左たちに近づいた。

「何あんた。謝ることもできない系？まさかのぉ？」

「うっさい、黒豚。あんたらがブヒブヒ喋りながら歩いてるからぶつかったんでしょう？自分のせいで壊れた携帯なんて知らないし」

携帯？

女子高生の足元を見ると、ギラギラデコってある濃いピンクの携帯に、ブラックコーヒーの缶が転がってる。

中身はもちろん携帯にもろかかって。

女子高生グループはみんな飲み物を持ってるから、携帯も飲み物も女子高生の物だろう。

ということは…当たり屋？

「豚ぁ？アタイらのどこが豚なわけぇ？目おかしいんじゃなぁい？」

「ふーん…。あんたらの目は随分腐ってんのね。太ももも腕もパンパンで岩面でさ」

少し解説すると、岩面は柚兎左流にアレンジされた言葉で、“岩みたいに大きい顔（面）”って意味。

まあ、その女子高生は、小麦色の肌に、かなり太めの体格、金髪に顔ははっきしいって整ってはいない。

まあ、メイクも厚すぎるし、結構離れてるのに微かに香水の匂いがするし。

最悪だわ。

「岩面ぁ！？アタイらが！？ちょっと可愛いからって調子のんじゃねぇーよ！」

「こんなか弱そうなうちらだけどぉ、ケンカの腕っ節はたつんだよねぇ」

「仲間もたくさんいるんだよねぇ」

「へー。どこがか弱いわけ？見た目マウンテンゴリラだわ。仲間って…弱い奴が強く見えるように群れてるだけじゃん。何威張ってんの？」

柚兎左…変わりすぎだよ。

少し前までは全然そんなんじゃなかったのに。

少なくとも自主的に喧嘩を売る子じゃなかった。

「こんのォォオオ！」

「柚兎左！！」

「海月！？」

痛い。

鈍い音がした。

とっさに柚兎左の前に立って、腕で顔らへんを防御したら、拳は腕に当たって痣を作った。

ヒビ入ったかな…。

「何あんた…」

「痛……。柚兎左の…この子の親友！…柚兎左、行こう？」

「ただでは返さないよ。あんたのダチはアタイにぶつかって携帯を壊したんだから。コーヒーも台無し」

やっぱり当たり屋だ。

親友として柚兎左を助けなきゃ。

でも…右手が痛い！

「海月」

「……柚兎左…」

「余計なことしなくていいのに。身代わりになりたいんだ」

「え……？」

ドンッ！

柚兎左に背中を押されて高校生の人たちにぶつかる。

柚兎左は少し離れて、倒れた私を見下していた。

「ゆう……さ？」

「殴りたいんでしょ？自主的に殴られたその子殴りな」
「ごめん、そんなつもりじゃなくて…ゆうさ…ゆうさ！！」
「じゃあね、また後で」
「やだ…イヤ……置いてかないで！柚兎左ぁ！」
「やっちまえ！」
「きゃあああああ！」

高校生たちは、足を使って私を蹴り始めた。

痛いよ……何で？

柚兎左…私は……助けたかっただけなのに……。

視界が涙で滲む。

体中が痛い。

悲鳴も出せない。

誰も助けてくれない……。

「オラオラァァァァ！謝れよ！ほら！」
「ゃ……めて…ごめんなさい…」
「聞こえねぇんだよ！」
「カハッ……。ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさい」

ローファーの砂が制服について汚れるし、体はたぶん痣だらけ。

時々なる鋭い痛みは切り傷かな。

「こら！止めなさい！」
「ゲッ！ポリ公かよ！」
「逃げるよ！」
ああ…警察か。
女子高生を追ってっちゃった。
二人残ってるけど。
「君、大丈夫？」
大丈夫なわけないじゃない。
「傷の手当てを」
手当て？
そんなのいらないよ…。
したって痛みは引かない。
痛む体を無理矢理動かして立ち上がる。
壁伝いで歩く。
警察が止めるけど、そんなの関係ない。
教室…行かなきゃ。
私…謝らなきゃいけないんだよね。

余計なことしたから…柚兎左は私を見捨てたんでしょ？

エスカレーターを使って地上に出た。

明るい日差しが、醜い姿の私を照らしつける。

すれ違う人はみんな私を可哀想な眼差しで見つめる。

やめて……。

見ないで…ごめんなさい……。

足の力が抜けてアスファルトに転んでも、誰も助けようとしない。

見てるだけ。

その視線がとてつもなく怖い。

やっとの思いで学校に着いた。

あーあ…遅刻か。

あんなに早く駅にきたのに。

廊下には誰もいなくて、私の足音が響くだけ。

先生に見つかったら教室の前に保健室行きだから、少しだけ良かったと思える。

三年Ｂ組の前。

扉は開いてなかったから、ある力で思いっきり開ける。

ガシャンと大した音も鳴らずに開いた扉の向こうには、クラスメートたちが楽しそうに話す姿。

なぜか柚兎左はいない。

何人かの者が扉が開いたのに気付いて、こちらをみる。

見た瞬間硬直。

そりゃそうだよね…。

こんな姿だもん。

みんな…怖い目で見ないでよ……。

次第に教室が静かになって、晋一と真広の声が聞こえた。

でもすぐに気付いて、こちらを見た。

「海月……」

「てめぇ…ボロボロじゃねぇか！！」

真広がすごい形相でこちらに向かってきた。

ごめんなさい…！

軽く私を叩いた。

たぶん土とかアスファルトの黒を払ってくれてるんだと思うけど、それさえも怖くてたまらない。

「ごめんなさい……」

「はぁ！？もっとでけぇ声で言えよ！」

「ごめんなさい」

「何が？」

怖い…怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖いコワイコワイコワイ！

いやだ…。誰か助けて…。

「ごめんなさい……ごめ…ん、なさ……ぃ…」

「おい！」

体の力が抜けて、真広の方に倒れ込んだ。

そこで私の意識は途切れた。

???：裏切りの朝（後書き）

あーあ……

次はいつかなぁ…（ー．ー；）ｙ－～～～

２０１１．０７．２８．ＴＨＵ

???・彼女の事情

「そっからは、真広と一緒に保健室にいて、少しして病院(ここ)に来て、安定剤打たれて寝てた。……これでいい？」
「あ、ああ」
「おまえ…そのときの腕の傷、大丈夫か？」
「痛いけど…まぁ大丈夫」
「無理すんなよ」
「大丈夫だって。少ししたらすぐ治るって」

うわー…ピンク色の空気が見える。
これ絶対錯覚じゃねぇって…、ついでに桃を反対にしたマークも見えるような気がする。

陸は完璧放心してるし。

にしても、海月はすげぇな。

今時友達を守って、自分が身代わりなんてないだろう。

かなり尊敬する。

逆に問題は柚兎左だ。

恩を仇で返すような奴ではなかった。
俺が知る限りの話だが。

中でも海月は特に仲が良かったし、助け合うことが多かった。

夏休みの宿題は半分にして片方が半分を解き、コピーして相手に渡したり、テスト勉強も教え合ったり、弁当を分けてやったり。
言うと切りがねぇくらいに、何でもしていた。

それが、守ってもらったくせに、殴り屋に引き渡すとは、正直信じられなかった。

海月の傷が、嘘じゃねぇと物語っているが、信じたくない自分がどこかにいる。

やっぱ昨日のやつがいけなかったのか？

『私は私のままでいられた』の言葉の意味や、『　　』と何て言ったのかよく聞こえなかった言葉、最後の『死にたい』という言葉。

柚兎左は相当追いつめられていたのだろう。

あんな緊迫した空気の中で、冗談なんて言えるわけがない。
つまり本気。
マジで死にたいと思ったのだろう。

死にたいという思考に至るまでの要因なんて、思いつかない。

そういう事柄があったのか、単にあいつの精神が弱いのか、思春期特有の思考か。

勝手に人のことを決めつけちゃ行けねぇのは重々承知だが、あいつの精神が弱いのもあるし、何かしらの事柄があったのだと俺は思う。

その事柄は、当たり前の如く見当もつかねぇが。

「晋一」
「……あ？」
「あ？じゃねぇよ！どんだけ俺を無視する気だ」
「悪ィ。考え事してた」
「へー…。帰るぜ？」
「もう帰らねーと母さんに怒られるぜー？」
「ああ、そうだな」
「急ぎなよー。五時過ぎてるんだから」

海月が携帯を取り出して、こちらに向ける。

こんなとこで携帯を出していいのか？
ダメなんじゃね？
とりあえず、ディスプレイを見ると、待ち受けはプリクラ。
ずっと前に五人で撮ったやつだ。
んー…若いな。俺ら。
じゃなくて！
時刻は五時十三分。

……マジで？

今日はいつも通りに帰らねぇと、昨日と同じような傷が増す。
せっかく痛みが引いたというのに！

「俺は帰る！じゃあな、海月！ありがとよ！」
「じゃ、俺も。んじゃーな、また明日」
「お、おい！待てって！あばよ、また今度」
「うん、またね！……はぁ……もうヤダな……」

急いで病室を出た俺たちには、海月の呟きは聞こえることなく消えた。

「はぁー…なっっがい一日だったな……。疲れた」

何とか殴られることを未然に防いだ俺は、風呂に入り予め冷房をつけて冷やした部屋に来た。
ひんやりとした空気が心地よい。
部屋に入ってすぐにベッドにダイブした。
あー楽だな。

一度にいろんなことがあって、いつも以上に疲れた。
にしても、柚兎左があんな風になる原因は一体何なのだろうか。

やっぱケガと関係あるのか？
……わかんねぇ。

海月との友情も壊れて、クラスから孤立して。

死にたいとか言ってたし、自殺行為でもしたのか？

……分かんねぇ……。

今日はもういいか。

明日も学校あるし、今日はもう寝るか。

……明日。

もう悲劇が起きなければいいんだが。

？？？？．彼女の事情（後書き）

サブタイトルが思いつきません！！
思いついたら付け加えときます。

???・数学

ここ一週間。
特に目立つことはなかった。
柚兎左は変わらずあの口調で、授業で答えるときもあんな感じになっていた。

まあ、先生からは問題児扱いされて、みんなからは少し怖がられてはいるが、嫌われてはいなかった。
そこはみんなの優しさと言うものだろう。

空気が悪いのは変わりないがな。

はっきし言って、あいつの言ってることは正論だし、誰も言い返せない。
おかげで何か暗い雰囲気が多いB組だ。

一つあいつに変化があったと言えば、頭が良くなったこと。
それはB組であればみんな言っている。

数学の問題で、先公がおもしろ半分に出した高校で習うはずの公式。

塾行ってる奴とか、がり勉なやつじゃなければそう簡単に解けるはずがない。
そんな問題を、柚兎左はいとも簡単に解いて見せた。
あのバカの部類に入っていた奴が、クラス一頭の良いやつより先に答えを言った。

先公は驚きのあまりか、チョークを二本落とした。

貴重な勉強道具を、先公自ら落とすなんて珍しい。
どんだけ驚いてるんだよ、というツッコミもなく、静かな空気が流れていたな。

あー…あのときは怖かったものだ。

先公もムキになって、それから今日までの授業毎回、大学の入試問題や専門的な問題を五問ずつ出すようになった。
専門的なものは、流石に誰も分からなかった。
柚兎左が解くかと思いきや、答えられずに降参したな。

あのときの先公の喜び様は、幼稚園児が褒められたときの浮かれようだった。
生徒一人にムキになる先公も大人げないような気がするが…俺たちも少しは勉強になるし、文句を言うものはいなかった。

てか、半分以上の奴が興味なしで寝てるがな。

俺は顔は伏せて、寝る体勢に入りながらも、先公の軽い解説はそこそこ耳に入れていた。

後ろの方にいるがり勉君は、必死にノート取ってるが別に今覚えんでもいいだろう。
どうせいつかは習うのだから。

という訳で、本日最後の六時間目の授業『数学』。

まだ先公の気が済んでなければ、どこから仕入れてきたか不明な難問を五つ持ってくるのだろう。

あー…かったるい。
まぁ授業が少し潰れるのはラッキーなんだけど。
『きりーつ』
誰かの号令で先公が入ってきたことに気づき、とりあえず立ち上がる。
うわー…何か資料たくさん持ってるんですけど。
『れー』
『お願いしまーす』
「お願いします」
せんせー…それは授業に使う資料なんですか？
それともいつものどっかの学校の入試とかテスト問題の資料ですか？
「じゃあ…早速……」
授業？それとも……
「知れば役立つ勉強の時間だ。今回は高校の問題だ。あ、高校入試のな」
「（……たまには役立つ問題を持ってきたな）」
「（やっとじゃね？）」
「（うちら、今からでる問題を冬に解くってことでしょー。ちょっとラッキーかも）」
教室が騒いでは先公の問題について感想を静かに述べていた。

「へいっ！これを解け！今日は全員分のプリントを用意しておいた！質問は受け付けんからな」
「え、うちらも解く系？」
「これでじっくり考えられます……」
「かったりぃ……」

……何だこれ。
偏差値いくつの高校の入試ですか、というほどの難しさ。
解けるわけねーだろ…、いやマジでさ。

意味不明な図形と、やたら多い記号の数。解こうと思えば何とか解けそうだが、面倒にも程がある。……でも、いずれはこれを解かねばならんときがあるから、今日の体力を精一杯使って解こうと思う。

せめて一問くらい解いて、塾か家で復習すればいいだろう。

「江川ぁできたか？」
「……」
「できてないんだな。……ムフフ」

き、気持ち悪……。
今のは聞かなかったことにしよう。そうだよな、うん。

「じゃあ解答用紙は預かっといて、次の授業に返すからな。号令！」

『きりーつ。れー』
『ありがとーございやしたー』
意味不明な挨拶とともに六時間目が終了した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1553q/

桜吹雪

2011年9月26日12時38分発行